
とりかえ物語～王女か王子か

鹿の子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とりかえ物語〜王女が王子か

【Nコード】

N4128P

【作者名】

鹿の子

【あらすじ】

弟王子が花嫁として、姉王女の婚姻予定先に向った？

王子と王女の追跡物語。

ファンタジーコメディ。

王子と王女に騎士や侍女や侍従、そして王女の婚約者も加わり物語は進んでいきます。

一話ごとに、違う登場人物の視点で書いています。自サイトでも公開中。

登場人物紹介

とりかえ物語／王女か王子か

主要な登場人物

- ・ポーラフェイ・・・主人公　クレイトン王国　第二王女　17才
- ・デイビット・・・ポーラフェイの弟　第七王子　14才
- ・オーガスタス・・・ブライアン王国　第三王子　21才　ポーラフェイの婚約者
- ・トゥルー・・・クレイトン王国の騎士
- ・ニカ・・・デイビットの従者
- ・リリー・・・ポーラフェイの侍女

名前だけだったり、一場面しか登場しない人物

- ウイリアム・・・クレイトン王国国王　歌が好き
- セネット夫人・・・クレイトン王国　行儀作法の先生
- ドミニク・・・クレイトン王国　第四王子　有事に有効とされるものが好き
- スチュアート・・・ブライアン王国オーガスタスの侍従　白髪
- ジェフリー・・・クレイトン王国　第二王子　絵が好き
- ローズ・・・クレイトン王国　第二王子妻

グレイスランド・ポラフェイの姉であり今では既に他国に嫁いでいる第一王女 美姫

1・王子はお嫁に？

1・王子はお嫁に？

「殿下、帰還したようです」

その声に、まだ幼い表情の残る少年は、彼の住む城にある塔へと向った。

目的の場所に近づくにつれ、その鳴き声と、慣れ親しんだそのものの独特の匂いがしてきた。

そこには、彼が飼う多くの鳩がいた。

そんな中、彼は迷わず一羽の鳩に近づくと、その足元についた通信管を外し、そこから小さな一枚のメモを取り出した。

『種まき終了。決行されたし。』

待ちわびていた返信に一瞬だけ顔を歪めると、彼はその場でメモをびりびりと破き、鳩の背を優しくなでた。

* * *

さてさて。

古今東西、どこのご家庭にも、何をしでかさかわからない御仁ごうじんと
いうのは、いるもので。

これから始まる物語は、その御仁が一家庭の私人いちでなく、とある
国の公人である王子様だったことによりおきた、大騒動でございます。

はて、どうなりますことやら。
ではでは、はじまりはじまり。

「ポーラ！ ポーラフェイはおるか！」

遠くから自分の名を呼ぶ声とそれに伴う地響きで目を覚ますと、
ポーラフェイはもぞもぞと羽毛布団から頭を出した。

ポーラフェイの柔らかなその薄茶色の髪は、昨夜の夜更かしのせいで、もじやもじやとこんがらがっていた。

そして、普段なら賢そうな色を放つ茶色の瞳も、今はまだ半開きの状態だった。

それでもポーラフェイは、むっくりと起きあがると、声の主に聞こえるようにと出来るだけ大きな声で「はい。お父様」と返事をし、もぞもぞと手探りで近くにあったガウンを探し引っぱり、間もなく訪れるであろう父親、——クレイトン王国国王であるウイリアムを迎えるべく身支度を始めた。

父親のウイリアムの声は、よく通った。

彼は、自分でも合唱団を持つほどの歌好きで、毎朝の発声練習も欠かさぬ熱心さを持ち合わせていた。

よって肺活量は王宮一。

遠くにいても、その朗々とした声は城中に響き渡るものであった。

つまり、内緒話の相手には、絶対に向かないタイプであるということだ。

ボタンと扉を開けると音とともに、「デイビットはどこだ！」と

国王の叫び声も飛んできた。

ポーラフェイの半開きの目には、早朝だというのに、何から何までしっかりと決まった洒落者の父親の姿が映った。

そして、ポーラフェイは、その寝起きのぼんやりとした頭で、父親の言葉を受け取った。

父親は今、自分の名前を呼んでいた（いや、叫んでいた！）、はず。

なのに今は、「デイビットはどこだ」と訊いてきた。
と、いうことは。

「お父様！ デイビットが今度は何を？」

ぱちりと目を覚ましたポーラフェイはベットの上で膝立ちになり、ベットサイドに立つ父親の服のぎゅっと握りしめた。

国王は、げぼげぼとむせた後、大きく息を吸った。

「ブライアン王国に嫁ぐと」

「は？」

ポーラフェイの聞き間違いでなければ、「デイビットは、ブライアン王国に嫁ぐ」という意味のことを父親は言ったのだ。

「嫁ぐって。……あの、だって嫁ぐのは」

クレイトン王国の第二王女であるポーラフェイは、隣国であるブライアン王国の第三王子との婚約がごく最近整ったところだった。

そして、嬉し恥ずかし半年後には、めでたくブライアン王国へと嫁入りをする予定になっていた。

つまりが。

ポーラフェイこそが、ブライアン王国に嫁ぐべき人物なのである。

しかも、言うならば、デイビットは王子だ。

男だ！！

「ああ、ポーラ！ 嘆かわしくも、デイビットは家来たちを騙して、女として、ポーラフェイ王女として、ブライアン王国に向ったのだ

！ 見よ、この書きなぐったような手紙を。『ブライアン王国にお嫁に行きます。追わないでください。』ポーラの代役デイビットより』くあゝ！ なんとること。王子が王子に嫁ぎにいくとは！ しかも相手は姉の婚約者！ このことがばれたら、両国間の国際問題にも発展しかねん。ああ、全くなんてことをしてくれるんだ、うちの王子は！ だから、ポーラ。おまえは、なんとしてもデイビットに追いつき、あやつを連れ帰ってきておくれ。もし最悪、ブライアン王国にデイビットが到着していたらなあ。……ああ、そんなことは考えたくない！！ が、しかし、考えなきゃいかんことだ。つまりそうならなあ、どうにかしてデイビットと入れ替わって、事態を丸く収めて欲しいのだ」

そこまで一気に話すと、流石に酸素が足りなくなっただのか、国王はへなへなとその場に座り込んでしまったのだった。

2・王女は旅支度をする

「デイビットってば」

深くため息をつきながら、ポーラフェイは旅支度をしていた。

普通、王女という立場ならば、旅支度は自分ではしないものだが、何せデイビットがポーラフェイとして彼女の侍女のリリーを連れていつてしまったため自分でやるしかなかったのだ。

勿論、ポーラフェイは王女であるので、一声かければ手伝う者はいくらでもいるであろう。

しかし、今回の旅支度はちと特殊だったゆえ、確認の意味もあり彼女は一人でそれを行っていたのだった。

更に言えば、常日頃から手がかかるデイビットに城の者たちも関わるが多いため、自然と彼女は自分のことは自分で済ますような癖がついてもいた。

デイビットは三つ年下の弟だった。

彼は、七番目の王子にして、兄弟姉妹としては九番目にあたる末っ子だ。

末っ子だったデイビットが、ポーラフェイによく懐いていたせいもあり、二人は兄弟の中でもとりわけ仲がよかった。

昨晚だって、「ポーラがお嫁に行くなんて、僕は淋しいな」なんて可愛いことを言うものだから、ついつい夜遅まで二人でデイビットの部屋に彼の好きなお菓子や飲み物を持ち込んで、話しこんでいたのだ。

ポーラフェイがお嫁に行くということで、改めて昔話をしたり、デイビットの趣味である伝書鳩への愛を聞いたり、そういえば行儀作法のセネット夫人が家族の都合でブライアン王国に行っているとか、そんなこんなで楽しく、時にはほろりとしながらも話に花を咲かせていた。

楽しかった。

とても。

だからついつい話すだけ話した後も離れがたく、二人してデイビットの部屋で、ベットで眠ってしまったのだった。

……が。

朝になってみたら、こんなことに。

一体彼は何を考えているんだろう、とポーフエイは思った。

裏切られた、というよりも、悲しいという気持ちの方が強かった。

「準備はどうだい、ポーラ」

その場にそぐわぬ陽気な声に振り向くと、第四王子である兄のドミニクが扉にもたれかかる様にして立っていた。

「お兄様」

ドミニクは、そのままポーフエイのところまで進んでくると、よしよしと頭をなでてきた。

「大丈夫、大丈夫。ポーラが使う馬車の用意は僕がしたから。デイビットが使ったものより早く走らせることができるものをねっ」

そう言つとドミニクは、にこりと笑った。

もしか、と思いポーフエイは顔をひきつらせた。

「あの、お兄様。お兄様が用意して下さる馬車は……」

「そうだ。どんな矢だつて撥ねかえす、泥道でもガンガン走る。僕の秘蔵の馬車、『灰色の悪魔』だよ。ははははは」

それは、戦いくさで使う、所謂戦闘用の馬車では、とポーフエイは言おうとしたが止めた。

言ったところで、どうにかなるものではないことを知っていたからだ。

ようやく泰平の世の中となった今、そういった物騒なものは表面上は必要なくなったはずなのだが。

第四王子は、そういった物騒な（平時には無用で、有事には有効

とされる）あれこれが大好きなのだ。

人生常に緊張状態が大事だと言い、城の庭のあちこちに罾をしかけるのは日常茶飯事。

一度など近くの森に誘い出され、デイビットと二人で兄の作った落とし穴に落ちてしまったこともある。

たまたま通りかかった森番の少年が助けてくれたから、事なきをえたが。

流石に、あの時はドミニクも両親から相当絞られたらしい。

全くもって、困った兄である。

「そうそう。トゥルーも同行させるから。あいつは、馬に乗るのも上手いし剣の腕もぴか一だから、何かと安心だろう。いやあ、しかし、デイビット。あいつも大胆な真似をするものだなあ。嫁に行っただってことはつまり、彼はあっち方面ってことだろ？ うむむ、ほほお。それは全く知らなかったなあ。まあ、あいつが無事にあちらに到着したとしても、問題はオーガスタスだな。彼がどう出るか。むむむ。非常に、非常に気になるところだなあ」

そう言つとドミニクは、ふむふむと考えるような仕草をした。兄の発言は微妙にずれている気もしたが、言つたところでこれまたどうにかなるものではないことをポラフェイは知っていた。兄はこういう人で、ポラフェイはそのままの兄を受け入れていたからだ。

そしてここで出てきたオーガスタスというのが、今回の一番の被害者であろうポラフェイの婚約者であるブライアン王国の第三王子であった。

ドミニクとオーガスタスは同じ学び屋で過ごしたこともあるという、ドミニク曰く親友だそうだ。

（でも、その割にはオーガスタスは一度も遊びに来たことはないが）

実はポラフェイは、隣国でしかも今は婚約までしたというのに、

オーガスタス本人とは会ったことがなかった。

品行方正で真面目な性格だと伝え聞くオーガスタスは、幼少ころからあちこちに留学していて、そして今現在は彼の母の母国で勉強中とのことだった。

目の前の兄の親友にしては、随分と立派で勉強熱心な人だとポーラフェイは心の中だけで思っていた。

そんな、品行方正で真面目で勉強熱心なオーガスタスが、近々帰国の予定となり、さて王子の嫁をどうしようか、となった時、丁度いい塩梅に隣国に未婚の王女が残っていたというだけの理由で、ポーラフェイに白羽の矢が立ったのは公の秘密。

暗黙の了解事項。

そしてこの話がブライアン王国から来た時に、大ハッスルしたのがドミニクだった。

今まで兄弟姉妹の婚姻に口など挟んだことがないドミニクが、やけに張り切りまくってオーガスタスを褒めたたえる演説を家族の前でぶちかましたのだ。

その甲斐あってか、めでたく婚約が整ったとき、ドミニクは涙を流さんばかりに喜んだ。

その際ドミニクの「筋肉万歳！」という謎の言葉を聞いていたのは、彼の側近であり幼馴染の騎士トゥルーだけだとか。

とにもかくにも、益があるこの縁談成立に国王も喜んだ。

そして、王家の娘として清く正しく育てられたポーラフェイは、この婚姻を義務としてさらりとドライに受け止めていた。

彼女は母である王妃から、民の平和を保つために自分の身を駒として使うのは、民のおかげで日々の糧を得ている王族にとっては当然のことだとしつけられてきたからだ。

なのに、デイベット。

同じ母の子どもなのに、この違い。

兄王子が言うように、これは彼のオーガスタスへの恋心が起こした行動なのだろうか。

それとも、他に理由があるのだろうか？

例え、それなりの理由はあったにせよ、彼は国益を損なう可能性については考えなかったのだろうか。

確かにデイビットは、何をやらかすか分かったもんじやない少年だ。

しかし、だからってそこまでのことをしでかすだろうか？

トランクに服を詰めながら、ポーラフェイはそのことを考えていた。

3・侍女は馬車で思案する

「ポーラフェイさま。お加減は、いかがですか？」

ポーラフェイ付きの侍女リリーは、朝の支度の時から具合が悪いと言っていた主人にそう声をかけた。

その声にポーラフェイは、ただ無言でこくりと頷いた。

朝、リリーが主人の部屋に行くと、そこには既に着替えも出発の支度も済ませていたポーラフェイが帽子に付いたベールを下ろしたままで椅子に座っていた。

ポーラフェイが、身の回りのことを一人で済ませてしまうのは珍しいことではなかったが、今朝はどうもその様子が変だった。

いぶかしがるリリーにポーラフェイは、どうやら風邪を引き喉がやられたようだ小さくかすれた声で言った。

それならば今回は無理せずにまた日を改めてとのリリーの言葉に、どうしても今日出発しなくてはならないとポーラフェイは首を縦に振らなかった。

ということで、予定通り馬車に乗り込み、目的地である隣国ブライアン王国に向っているのだが。

ポーラフェイの具合は一向に良くなる様子もなく、馬車に乗ってからは一言も口を利こうとしない。

主従関係にはあるものの、年が近いせいかポーラフェイとリリーはよくおしゃべりをする仲でもあった。

一緒にいてもこんなに話さないことは、今までなかった。

「ポーラフェイさま、大好きなレモン水をお飲みになりますか？」

再びリリーはポーラフェイに話しかける。

するとまたもやポーラフェイは無言で小さくコクリと頷いた。

余程喉がお辛いんだわとリリーは思いながら慎重にレモン水を力

ツプに注ぐと、それをそつとポーラフェイに手渡した。

ポーラフェイはこくこくとそれを飲み干した。

その様子に、リリーは少し安堵した。

受け取ったカップをリネンで拭きながら、リリーは今回の出発について思い返した。

出発を言い渡されたのは、昨晚のことだった。

リリーの部屋に届いた、ポーラフェイからのメモが始まりだった。

こうしたメモのやりとりは、以前からよくあるものだった。

ポーラフェイから届くメモは一枚の紙なのだけれど、それがいろんな形に折られていて、広げると文が読めるようになっていた。

それは東の国で行われる紙遊びの一種らしいのだが、ポーラフェイは彼女の苦手克服も兼ねて、その遊びを積極的に取り入れていたのだ。

前回に比べ随分と綺麗になった「折り」を楽しみながらリリーがそれ開くと、そこには「明日、早朝馬車にてブライアン王国に向う」との文があった。

驚きながらもその先を読み進めると、どうやらポーラフェイの行儀作法の先生であるセネット夫人が、隣国ブライアンで急に体調を崩したとの知らせがきたということだった。

そのお見舞いに至急行くことになったとあり、更に驚くことのは国王陛下のサインまであったのだ。

セネット夫人は、国務で多忙な王妃に代わり、ポーラフェイ、そしてすぐ下の弟王子であり今は他国に留学中のノチアスと、一番下のデイビットを育てた女性であった。

セネット夫人自身は、この国で生まれ育ったのだが、夫人の母親はブライアン王国の出身で今はそこで暮らしていた。

その母親の具合がよろしくないということで、セネット夫人は十日ほど前から休みを取りブライアン王国に行っていた。

それが今度は、セネット夫人自身も体調を崩したのだという。流行病ではないとのが書かれていたが……。

主人であるポーラフェイが、誰にでも愛情豊かで、心配りができ、正義感が強いということは、側で使えるリリーが一番よく知っていた。

その性格を国民の誰もが愛し、ポーラフェイは「クレイトン王国の良心」と呼ばれている。

今回のことも、なるほど、ポーラフェイらしいといえばポーラフェイらしいといえるのだが。

そうは思いつつも、自分は何かを見落としていることがあるのではないかとも思ったりした。リリーだった。

馬車に乗り、他国に出かけるということは、めったにないことなので、ほんの少しだけ浮かれてしまう気持ちもあった。

あちこちの国に留学している王子たちとは対照的に、クレイトン王国の王女たちは、結婚するまでは国内で過ごすのが一般的だったからだ。

ポーラフェイの姉であり今では既に他国に嫁いでいる第一王女グレイスランドも、美姫として有名だったせいもありあちこちの国の催事に招かれていたが、国王はそのどれ一つとして受けなかった。

同じような「箱入り娘」ではあるが、グレイスランドの場合は彼女の豪快な性格もあり心配に思うことはなかったが、ポーラフェイについては自分が年上ということもあるせいか、正直心配だらけであった。

リリーは十九歳。

そしてポーラフェイは、十七歳。

リリーは十五の時からポーラフェイに仕えていたので、側にいてもう四年になった。

「クレイトン王国の良心」と呼ばれる、ポーラフェイは、そう呼

ばれるくらい、無垢で純粹だった。

そんなポーラフェイだからこそ、結婚にも疑問を抱かず、相手のことも知ろうとせず（そもそもオーガス王子は自国にいないことが多いので情報も少ないのだが）、全てを受け入れて嫁ぐつもりでいるようだ。

自分たちの立場と、王室のそれとは違うのは重々承知だが、それにしてもポーラフェイからは「結婚」という言葉から想像できる、ときめきやきらめき、まあ、国同士の結婚でもあるのでそういったものはないにしろ、だったら、不安や不満でも、とにかくそういった類の感情が全く感じられないのである。

王女としては、それは正しい姿なのかもしれないが、はたしてそれでいいのか。

こんなことは口が裂けても言えないことだが、ポーラフェイの性格を考えると、もつと普通の穏やかでささやかな暮らしと愛情がある結婚が似合うのではないかと思ってしまうからだ。

一度も会ったことない人と、既に婚約をし、半年後には嫁ぐなんて。

せめてオーガスが、噂通りに誠実で真面目な王子であり、ポーラフェイを大事にしてくれることを祈るしか、リリーにはできなかった。

—— そう、祈るしかないのだ。

庶民であり権力などとの関係も縛りもないために、返って身分のある方々よりも本当の意味で情報が入るからこそ、リリーはそういった噂の類が眉唾物であるということを良く知っていた。

知恵があると言われる貴族の子息ほど、知恵はなく。

憤ましかだと言われる令嬢ほど、奔放だ。

その式に当てはめると、「誠実で真面目な王子」とは一体どれ程のものか。

考えただけでも、頭痛がしてくる。

その「眉唾疑惑王子」オーガスタスの国へと、馬車は向っていた。

もしかしたらあちらに滞在中、オーガスタス王子の正確な情報を得ることができるかもしれない、とリリーは思った。

まあ、得たところで婚約をどうにかできるはずもないのだが、心づもりは出来るかもしれない……。

馬車の窓の向こうに、小さく城が見えてきた。

ブライアン王国の城である。

ポーラフェイがブライアン王国に嫁ぐ半年後、リリーのお役はご免である。

リリーは淋しい気持ちを紛らわすように、じっとブライアン王国の城を眺めた。

4・侍従の願い

「オーガスタスさま！」

ブライアン王国の第三王子であるオーガスタスは、侍従の声に馬を引く手を止めると振り向いた。

「陛下へのご挨拶は、もうお済みになりましたか？」

額から汗をだらだら流し、はあはあと息を切らしながら白髪の侍従スチュアートはオーガスタスを見上げた。

「オーガスタスさまがご帰国されたと聞き、陛下はお待ちになっています」

ぜいぜいと息をしながら顔を真っ赤にして語るスチュアートを、ゆづに彼より三十センチは高いオーガスタスは見下ろすと、困ったような顔をして生えたままになっている髭をぽりぽりとかいた。

「挨拶かあ。今、戻ったばかりだからそう急がなくても。それに、ほら。まだ、正式に帰国したってことでもないし」

オーガスタスの言葉にスチュアートは、細いかだらのどこからそんな声が出るのかと驚くほどの大声で「帰国に正式なものにもありませんか！」と言ったあと、流石に年甲斐もないと思ったのかコホンと一度咳をし声のトーンを落とすと「確かに、オーガスタスさまのご帰国予定はまだ先でしたが」と続けた。

本来ならオーガスタスの帰国は、あと一カ月は先のことだった。

だから、何の知らせもなく帰国した第三王子に、城の門番からして驚きつばなしかった。

「そうそう。だから、まあ、そんなに挨拶云々で焦らなくてもさ。ちよっこつと、そこまで出かけてくるだけだから。ちよっこつとさ。すぐに戻るって」

そう言うときオーガスタスは、手を振りスチュアートを後に歩き出そうとした。

「お待ちくださいませっ！」

その言葉と同時に、スチュアートは木に止まる蟬のように、オーガスタスの大きな腰にしがみついていた。

「おおっ！ な、なんだ、なんだ」

「では、せめて。せめて、そのような格好だけでも改めてお出かけください！」

スチュアートのいうところの「そのような格好」を見下ろしながら、オーガスタスは唸る。

「まあ、まあ、そんな細かいことは気にするなって」

ははは、とオーガスタスは笑うと再び歩き出そうとした。
するとまた、スチュアートは蟬になった。

「おおお！ なんだ、今度はなんだよ」

蟬のスチュアートを見下ろして訊く。

「ではせめて、そのお顔を」

「顔？ 顔か？ 顔なら大丈夫。洗ったぞ」

オーガスタスの返事にスチュアートは蟬の力を強める。

「オーガスタスさま！ 洗う、洗わないの問題ではございません。そんなお顔の様子であちこち歩かれては、せつかくのよき縁談の妨げになります。悪い評判でも立つたらどうなさいますか！」

評判。

まあ確かに、とオーガスタスは思う。

確かに、顔中髭だらけではあった。

「まあほら、母上の母国は寒かったから剃りたくなかったんだよなあ。でもまあ、帰国したわけだし。剃るよ、剃りますよ。いずれは」

オーガスタスの母の母国は北に位置する緑豊かな森を持つ国で、気候以外はこの国と似ていた。

いずれでは困ります、とスチュアートは訴えた。

「はいはい、分かった、分かった。よく、分かった。剃るから。帰ってきたらすぐにでも。つるつるに剃るから。それにさ、何も遠くまで行こうってわけじゃないってことは分かっているだろ？」

ほんのちょこつと行つてちょこつと帰つてくるわけだつてこともさ。スチュアートが心配するような評判云々が問題になる場所に行くわけでもないってことも」

オーガスタスにしても、髭に何かしらのポリシーがあつたわけではなく、面倒だし、寒いし、の繰り返しでするするところなつていたのだから。

「……お約束ですよ」

スチュアートはしぶしぶといった感じで、蝉をやめた。

「しかし、よくまとまつたなあ」

自分の縁談について、オーガスタスは人ごとのようにつぶやいた。

「もう、頑張りましたからっ」

スチュアートは鼻息荒くそう答えた。

「そうだよなあ。びっくりしたぜ。まさか、自分のあんなにいい評判を入づてに聞くとは」

オーガスタスがいた北の果てのかの地まで、「ブライアン王国の第三王子は、品行方正で真面目で勉強熱心だ」との噂が流れてきたのだから。

それをオーガスタスは酒場で聞いたのだが、驚きのあまりあやうく鼻から葡萄酒が出るところだった。

と同時に、遂に自分の縁談話が動き出したんだな、とも思った。

しかし、まあ都合よく、隣国に未婚の王女が残っていたものだと感じもした。

……お気の毒に。

「ポーラフェイさまは、素晴らしい女性であります」

ポーラフェイとは、オーガスタスの結婚予定の相手である。

「でも、名前は変だよなあ」

「オーガスタスさまっ」

オーガスタスは、どうも思ったことを口にしてしまうところがあり、それは（それだけでもないが）スチュアートの悩みの種でもある。

った。

「オーガスタスさまには学問ばかりでなく、違った学びについても必要でございますねえ」

噂にある「勉強熱心」のところだけは、真実であるオーガスタスであった。

「違った学び？」

「はい。女性との付き合い合い諸々でございます」

「は？ 今更そんなことを」

「いえ。必要でございます。そういった口のききかたも、どうかポーラフェイさまにはなさらないくださいませ。今までオーガスタスさまと親交があった女性とポーラフェイさまは違うのでありますから」

「違う？ 彼女は特殊なのか？」

「違います。ポーラフェイさまが標準なのでございます」

「つまり、俺様の今までの親交のあった女性は、標準以上でレベルが高いってことかあ」

「オーガスタスさまっ！」

「はいはい。わかりましたよ。冗談だつて。ともかく、ちゃちゃつと早いうちに行つて調べたいことがあるから、話の続きは帰つてきてからな」

「オーガスタスさまあ……」

「はいはい。スチュアートが心配しないように、誰にも見られないように、いい子の顔してこそそそと行つてくるからさ」

大きな背中を丸める様にして、オーガスタスはスチュアートを見た。

そんなオーガスタスを見ると、スチュアートもついついほほ笑んでしまう。

三番目の王子のこういつた茶目つけは、昔から変わらないところだ。

「どうぞ、早くお帰り下さいませ。そして、どうか危険なことはな

「さらず」

スチュアートは、彼の出来る精一杯の権限でオーガスタスに静かに懇願した。

「おう」

しかしスチュアートの願いのこもりまくった言葉に対して、オーガスタスからはやけに軽い声で返事がきた。

「……オーガスタスさま。くれぐれも。くれぐれも、遠くには行かれませんか」

急に嫌な予感がしたスチュアートは、ダメ押しでそう付け加えた。

「へいへい」

スチュアートの眉間にしわが寄る。

「昔のように、ちよっと出かけるとおっしゃって、一週間も城を出たつきり彷徨うなんてことは、な・き・よ・う・にっ！」

「ほいほい」

「オーガスタスさまあー！」

「もう、わかったから。すぐに帰ってくるし、髭も剃るし、顔も洗うし、好き嫌いもしないし、早寝早起きもするし、眠る前には歯も磨くし、遠くにも行かないって、な。ほら、安心したろ？ もう心配せずに城に戻れ。俺の事より自分の体を心配しろよ。立ちっぱなしは、年寄りにはよくないぞ」

そう言つとオーガスタスはひらりと馬に乗った。

そしてスチュアートに手を振と、駆け足で馬を進めていった。

ぐんぐんと遠くなつていく大事な王子の後ろ姿を見守りながら、お嫁さまがくることでどうか少しは落ち着いて下されば……と強く強く願うスチュアートなのであった。

5・いざ、ブライアン王国へ

「は、速いっ」

ドミニクが用意した、灰色悪魔は、なるほど速かった。外の景色を眺めていると酔ってしまいそうになるくらい、速かった。

ポーラフェイは、城を出るときのことを思い出しては、そういえばこれはもう「灰色悪魔」ではないんだわとも思った。

ドミニク自慢の灰色悪魔は、なるほど灰色だった。そしてゴツかった。

それは、どこからどうみても、旅をするような外見ではなかったのだ。

すると、どこから湧き出たのか。

兄であり第二王子であるジェフリーとその取り巻きが、そろそろとにこやかにやって来たのだ。

みなの手には、当然のようにペンキ缶。

途端にドミニクの顔は、引き攣った。

しかし、そんなドミニクにお構いなしに、ジェフリーと取り巻きは、灰色悪魔をぐるりと取り囲んだ。

息をのむ周りの人々。

するとジェフリーはポーラフェイに向い、「少々時間を貰うぞ」

と言うと、「かかれ!」との合図をかけ、取り巻きともども一斉にハケにペンキをつけた。

ペンキの色は白だった。

純白。

立ちつくすドミニクの目の前で、灰色だった馬車がどんどん白に変わっていく。

文句を言いたくても相手は兄王子。

ドミニクは、金魚のように口をぱくぱくさせることしかできなかった。

そして、あつという間に真っ白になった馬車を、みなあつけにとられて眺めていた。

のっぺりと白く塗られた馬車。

次に、取り巻きの一人が徐にパレットを開き、それを王子の前へと差し出した。

ふむ、とその様子に満足した王子は、「ローズ！」と突然彼の妻の名を叫んだ。

しかし毎度のことながら、妻ローズの姿はない。

まあ、当然といえば当然である。

これから起こることがあらかじめ分かっているのだとしたら、誰だつてこの場にはいたくないだろう。

みな、それでも沈黙を守った。

妻ローズの不在にめげることないジェフリーは、「君に捧ぐ！」と大声をあげると、筆をとり、純白に塗られた馬車に赤い「何か」を描きだした。

毎度のことながら、まるで謎解きのようなその絵を、ポーラフェイはじつと見つめた。

ジェフリーは、絵も詩もたしなむ、芸術肌である。

結婚してからは、主に妻のローズが被害……でなく、モデルとなり、彼女の肖像画とおぼしきものや、彼女にささげる詩をせっせと創作しているジェフリーであつた。

しかし、どうも王子の肌と芸術はそりがあわないようで。

つまりが、才能ゼロ。

ここに悲劇が生まれている。

現在進行形で。

気がつかないのは、当の本人のみ。

うーん、魚の内臓？

ポーラフェイが最初に思ったのは、それだった。

それとも、鳥の内臓？

次に思ったのがそれだった。

王女でありながらも、厨房を覗くのが好きなポーラフェイの想像の行き先は、ともかく内臓だった。

兄王子は、赤い絵の具を使ったはずなのに、何故か黒も少し混じったようでした。

それがそこはかとなく、内臓系の色を醸し出していたのだった。

完成したんだか、していないんだかも分からない絵を描き終わったジェフリーは、一人満足げなため息をついた。

そして、そのため息を聞いた取り巻きたちが、用意していた（！）赤いじゅうたんをササツと敷くと、ジェフリーはその上に立ち、懐から紙を取り出した。

そして。

「愛するローズに捧ぐ！」との言葉を皮ぎりに、「君のために 今日も薔薇の絵を描いた」と妻への愛を語る詩を読みだした。

内臓じゃなくて、薔薇かつ！

みな心の中で思う。

が、決して口には出さない。

ジェフリーが絵を描きだしてからは、誰一人として口を利くものはいなかった。

びっくりしてしゃべることができなかった、というのもあるが、下手に口出しをすると、それが十倍になって返ってくることをみな知っていたからだだった。

その後は、特に変わったことも起きず（一つ挙げるとすれば、馬車の名前が「灰色悪魔」から「愛のローズ号」に変わったくらいだろうか）、ポーラフェイ一行は馬車に乗り込み、そして今、その馬車はぐんぐんとブライアン王国への道を突き進んでいた。

その馬車の中で。

ポーラフェイは、男装をしていた。

デイビットがポーラフェイになっているわけだから（つまり女装しているのだから）、ここでポーラフェイがポーラフェイとして隣国へ向うとなると、ポーラフェイが二人になってしまうからだ。

ということで、ポーラフェイはデイビットの服を着て、デイビットとして、姉の付き添いとして王国へと向かうというシナリオになっているのだった。

王国到着前にデイビットを捕まえられたら、説得してそのままにも帰国。

たとえ王国に着いたあとでも、デイビットとしてポーラフェイ（を名のるデイビット）に近づき、そこでこっそりとお互いの入れ替えができるだろうというのがこっちの作戦であった。

そして、そういうことならと、思いきって髪も切った。

鬘かつらで十分だという話も出たが、あれは重くて暑くてあまり衛生的にもよろしくない品物だ。

婚姻まではまだ半年はある。

それまでには少しは髪も伸びるだろうし、昨今の流れとして、女性の髪の長さも自由であった。

また、耳下くらいの長さがあれば、あれこれピンや飾りを使い「なんちゃってアップ」に侍女のリリーならできるので、まあ、そこらへんも問題ないと踏んだのだ。

そう、今のポーラフェイの髪型は、ちょうど耳の下あたりで切りそろえたおかつぱ頭だ。

それは今のデイビットの髪型でもあった。

残念ながら髪の色を染める時間はなかったが、まあそこら辺はどうにかなるだろうと。

ポーラフェイの髪の毛は、薄茶色だった。

デイビットもそうなのだが、彼の方が若干金色に近いものになっていた。

眼の色は二人とも薄茶だが、顔の造りがデイビットの方が派手だ

った。

背丈は、丁度同じくらいなポーラフェイとデイビット。

大筋では似てくはないが、全体として見るとデイビットの方が造りが派手で、華やかな印象を受けた。

もし、デイビットが姫だったら、年頃になれば、美しさで名高かった姉に負けない評判が立っただろうとポーラフェイは思った。

……たとえ、行動に難があつたとしても、だ。

今回の旅の同行者は、デイビットの従者であるニカと御者のクリス、そして騎乗して伴走する騎士のトゥルーだった。

ニカは馬車に、ポーラフェイと同乗していた。

ニカは、昔から剣の腕が認められていたという人物で、今回のポーラフェイのお供としては文句なしであった。

年は、ポーラフェイと同じか少し下に見えた。

「ポーラフェイ様、誠に申し訳ございませんでした」

馬車が動き出した途端、今まで口をつぐんでいたニカがそう言い、深々と頭を下げた。

「ニカ、頭をあげてちょうだい。デイビットがこんななのは、今に始まったことじゃないんだから。あなたがいちいち責任を感じていたら、神経がもたないわ」

ポーラフェイは密かにこの従者が、心労のために過労死するかもしれないと不安になることがあった。

「それに前から言っているでしょ。こんな風に、家族さえも予想もつかない行動をするデイビットだからこそ、いずれ国の宝となる時が来るって」

非常時、彼の行動で何かを突破することができるのではないかと、ポーラフェイは常々思っていた。

やっぱり、何かあつたのだろうか。

思考はまたそこに戻ってしまう、ポーラフェイだった。

6・目撃者は王子

目的の地まで馬を走らせたオーガスタスは、下馬すると手綱を適当な木に括った。

オーガスタスの降り立った場所は、鬱蒼とした森の中。

この森は、ブライアン王国の三分の一を占めており、隣国クレイトン王国との間に国境のように帯状に広がっていた。

オーガスタスは馬の鼻面を撫でると、ぶらりぶらりと森の中を歩きだした。

妙な報告がきたのは、一週間ほど前だ。

何者かが、森の樹木を無断で伐採しているというものだった。

森に関しての全ては、第三王子であるオーガスタスに委ねられていた。

森の資源や森そのものの存在が、生命の源として重要な役割を果たし、外交にも使えるとふんだ父王は、三男であるオーガスタスを樹木や森の活かし方について学べる国々へと留学させ、そしてつい最近までは王妃の母国であるフイント王国に学びに行かせていたのだった。

フイント王国は、ブライアン王国よりかなり遠方に位置した北国であるが、森の活かし方についてはいち早く気がつき実践している国であったので、学ぶところは多かった。

もともと森大好き人間で幼いころから森にいりびたっていたオーガスタスには、ぴったりの役目だったといえよう。

机にかじりついで勉強には今一つ身が入らなかったオーガスタスだったが、好きな森に関してのあれこれは、面白い位にほとんど知識を吸収していった。

学べば学ぶほど、オーガスタスの森への愛は深まった。

森の健康は、国益につながる。

そして、森は、人の健康にも影響を与えることをオーガスタスは学んだ。

オーガスタスには、これからしたいいくつかの案があった。そのオーガスタスにとって、無断での樹木の伐採は、許し難いことだった。

そしてその伐採箇所にも、非常に気になるものがあった。オーガスタスは、報告にあった伐採箇所の「はじまり」となる場所へと歩いていった。

と、その時。

オーガスタスの視界の前方で、とんでもないことが起きた。馬車が強奪されたのだ。

まず、凄い勢いで馬車が走ってきたかと思うと、それを上回る勢いで二頭の馬が駆けてきた。

二頭の馬のうちの一頭は二人乗りだったので、計三人による強奪だった。

そしてそれは、まるで計画されていたような鮮やかな手口でもあった。

結果、憐れな御者だけが殴られ地面に捨て置かれると、二人乗りしていた馬に乗っていた男の一人が御者台にあがり、馬車を操り、そして二頭の馬とともに去って行ったのだ。

—— オーガスタスにとって、非常に興味深い方向へと……。

咄嗟に木陰に隠れその一部始終を見ていたオーガスタスは、完全に馬車と馬が見えなくなった状況を確認した後、倒れた御者に近づいていった。

御者はというと、すっかりとのびた状態で、地面に横たわっていた。

オーガスタスは「失礼」と一応声をかけてから、手早く御者の様子を調べた。

気絶しているのか、ぴくりとも動かない。

まだ年若い、どちらかといえば少年のような御者だった。

体のあちこちを調べても、怪我もないようで、そのことにオーガスタスは一先ず安心した。

着衣の様子から考えると、商人というよりは貴族につかえている者だろうと思えた。

そういえば、馬車もなかなかの高級品だったし、とオーガスタスが考えていたところ、彼の耳には再び馬車と馬の足音が聞こえた。

オーガスタスが顔を上げると、馬車に伴走していた騎乗の騎士が、こちらにむけて勢いよく馬を走らせてくる様子が見えた。

おやおや、とオーガスタスがその騎士を眺めると、「その者！動くな！」と叫ぶ声が森に響いた。

その生真面目な声にますますの確信を持ち、騎士を眺めるオーガスタス。

その様子に騎士も、おや、という表情になった。

オーガスタスには、手に取るように相手の気持ちがあった。

——あの髭男は、姿形は似ているが……。いやしかし。まさか。

動くなと叫んだ騎士は、用心深い様子でオーガスタスまで近づくと、はつとした表情となり、慌てて下馬した。

「オーガスタス王子！ 大変失礼いたしました！」

騎士は、手綱を持ったまま深々と頭を下げた。

「おつ、トゥルー。久しぶり」

オーガスタスは動じることなく、隣国の騎士トゥルーに声をかけた。

いろんな国へと留学する中で、オーガスタスはドミニクの護衛も兼ねてともに留学していたトゥルーと知り合っていたのだ。

トゥルーといえば、オーガスタスに会ったことに戸惑いを感じているように見えた。

見た目への戸惑いもあるだろうが、何よりもオーガスタスがここ

にいることへの戸惑いが大きいように見えた。

事実、オーガスタスの帰国予定はまだ先で、ここに居る筈はないのだから。

「ちよつと気になることができたんで急遽帰国したのさ。このこと、まだそつちには内緒な」

トゥルーが仕えるクレイトン王国の王子ドミニクは、オーガスタスの婚約者の兄にあたる。

なので、知られると色々と挨拶に行ったりせねばならず、色々と面倒だと思えたのだ。

オーガスタスはトゥルーに「向け一指し指を唇にあてると、自分の存在の口止めを図った。

つまり、目の前の人物がブライアン王国の王子であると誰にも言えない状況にトゥルーを追い込んだのだ。

オーガスタスの言葉にトゥルーは、「かしこまりました」と答えたものの、その表情は明らかに曇っていた。

そんな様子を見て見ぬふりをしながら、「ところで、トゥルー。

この御者、知ってるか？」と、オーガスタスは倒れている御者を指した。

「なんと！」

トゥルーは慌てて、御者の側にかがみ込んだ。

トゥルーは御者の息を確かめると、先程オーガスタスがしたのと同じ手順で身体の様子を確認し、とりあえずほつとした顔つきになった。

「ついさっき、俺の目の前で、一台の馬車が馬に乗った三人の男たち**に強奪された**」

トゥルーが落ち着いた様子を確かめた上で、オーガスタスは自分が見たことの説明をしだした。

馬車の後を二頭の馬が追いかけてきたこと。

そして手口も鮮やかに、馬車を強奪したことなど。

オーガスタスが話すほどに、トゥルーの顔がこわばりだした。

その様子を眺めながら、強奪された馬車に乗っていたのは身分の高い貴族であることを確信したオーガスタス。

いや、貴族というよりは、むしろ――。

「トウル？」

オーガスタスの耳に、心配そうに騎士を呼ぶ声がした。

そして、何故かその声に、当のトウルが怯んだような顔をしたのも見え。

更に、気のせいか、トウルがオーガスタスの顔を一度ちらりと見たようにも思え……。

オーガスタスがその声の方向に目を向けると、一台の停まった馬車の扉から黒服を身にまとった従者とともに一人の貴族らしい少年がゆっくりと降りて来るのがみえた。

「トウル」

少年は、今度はしつかりとした声で騎士を呼んだ。

オーガスタスは、じろりとその少年を見た。

小さな体に、薄茶色の髪。

まるで、山ねずみだな。

焦ったようにトウルがその少年に駆け寄る様子を、オーガスタスはじっと眺めていた。

8・奇妙な出会い

「トゥルー？」

心配そうに自分の名前を呼ぶ声に、トゥルーはハツとした。

その声は、自分が仕える王国の第二王女ポーラフェイのものだった。

自分たちが追いかけてきたデイビット王子は、誘拐された、そして――。

それを目撃したのは、王女の婚約者であり本来ならここにいるはずのない隣国の王子オーガスタス。

更にその王子は、髭は伸び放題、髪も伸び放題のとてもない姿で。

そしてそれを言うなら、王女ポーラフェイも、なんたることか男装中であつた。

トゥルーは文字通り、目の前が真っ暗になった。

「トゥルー」

凜とした声で自分の名を呼ぶ王女に促されるように、トゥルーは急いで、馬車へと駆けよつた。

二カに手をとられ、ポーラフェイがゆっくりと馬車から下りてきていた。

デイビットの服をしっかりと着こんだポーラフェイは、確かに少年らしく見えた。

最近では煩くなくなったとはいえ、まだまだ短髪の女性はそう多くはないので、その髪型だけでも「男の子」という先入観を抱くの役に立っているだろうと思えた。

さて、この場合どうすればいいのだろうと、トゥルーは考えた。

オーガスタス王子からは、自身の身分の口止めを命じられている。

うむ。

まあ、しかし、いくら隣国の王子とはいえ、自分が仕える国の王子ではない。

優先すべきは、仕えるべき国の王女、ポーラフェイである。

—— 王女にオーガスタスのことを言うべきか。

そう、理屈としては言うべきなのだろう。

しかし、オーガスタス王子の今の姿は、お嫁入り前の女性にとつてはどのようなだろうかとも思う。

あの、熊と狼を足して土埃でコーティングしたような大男を、ずっと王宮で育ちおそらく恋もしたことがないであろう王女に、「婚約者殿です」などと、果たして言えるだろうか。

失礼を承知で言えば、髭も剃り、髪も切り、姿を整えたオーガスタスであろうと、なかなか王子には見られないのだ。

オーガスタスとドミニクとトゥルーで一緒にいた時も、王子と見られたのはドミニクとトゥルーだったくらいだ。

オーガスタスには、野性的で型にはまらない勢いと、その雰囲気
に相当するだけの実力もあつたため、王子とは思えぬ渾名あだなもあり…。

そう思いながら、トゥルーは不思議な気持で、白く塗られた「愛のローズ号」をちらりと見た。

…… ともかく。

いくらポーラフェイがしっかり者だとはいえ、もしオーガスタスの正体について知ってしまえば、どこかしら表情に出る可能性があるり、そうなるとそのことがオーガスタス王子に悟られてしまうかもしれない。

そうなったらそうなつたで、また面倒なことになる。

今、一番大事なことは。

とにかく、この場をお互い引つ掛かりのあるものでなく、さらりとやり過ごしてしまうことだ。

顔を合わせるもの、今だけ、この時のだけなのだから。いや、よく考えると、顔を合わせる必要もないのでは。

オーガス王子は自分の身分のことは隠すように言った。ということは、わざわざ王女が馬車を降り、彼に挨拶をする必要はないのだ。

これからのやり取りは、全て自分とオーガスで行われるのが、ここでの筋だ。

そう判断したトゥールは、少しほっとした気持ちになった。

「何がありましたか？」

ポーラフェイは、心配そうな顔をしてトゥールに尋ねる。ちくり、と胸が痛むトゥール。

「申し上げます、ポーラフェイさま」

トゥールはオーガスには聞かえないくらいの小声で、ポーラフェイに話し出す。

「デイビット王子は、何者かに誘拐されました。御者のトマソンは、デイビット王子を誘拐した者たちに御者台から突き落とされたようですが、幸いたいした外傷はないようです。……気絶していますが」

ポーラフェイはきゅっと表情を引き締めると、「わかりました」と言った。

「その様子の一部始終見ていたのが、あそこにいる男……です」

トゥールの言葉に、ポーラフェイはそっと、オーガスのことを見た。

ポーラフェイは、ぺこりとオーガスタスに礼をした。

その様子を見て、トゥルーは嫌な予感がした。

「私が直接、あの男性からその様子を聞きます。トマソンの様子も気になりますし」

一歩踏み出そうとした王女を、トゥルーが阻む。

「あの男は、ポーラフェイさまが直接言葉を交わすには不適切な身分だと思われます」

「でも、今私は、ポーラフェイ王女ではないのよ」

「そ、そうかもしれませんが。しかし」

「王子が攫われたのです。身分だと言っている場合ではありません。情報はより多く、直接聞きたいのです」

止めるトゥルーの横をポーラフェイは歩きだした。

「お待ちください」

トゥルーは慌て、再びポーラフェイを止めた。

「かしこまりました。ポーラフェイさまに従います。ではせめて、今のポーラフェイさまの御身分をお決めくださいませ」

トゥルーが騎士として知っている以上、ポーラフェイのことを一般市民とはオーガスタスは思っていないだろう。

また、当初の予定では王女は、デイビット王子としてブライアン王国に向っていた。

しかし、これからのことを考えると、ポーラフェイがデイビットを名乗るのも不適切と思われた。

誘拐事件に、王室の人間が関わっていたとなると、外交問題になる。

しかも、攫われた王子の国であるクレイトン王国と、その舞台になったブライアン王国は、近々婚礼を控えているデリケートな関係だ。

「そうですね。母方の遠い親戚ということでしょう。兄妹そろってクレイトン王国に遊びに来ていたことにします。行き先は、

そうですね、もともとと同じくセネット夫人のところでもいいでしょう。交流があつたということで、お見舞いに。そして私の名前は、

……フィーで。これからは、そう呼ぶように」

ポーラフェイの言葉にトゥルーは頷いた。

「かしこまりました、フィーさま。では、こちらへ」

そういつてトゥルーは、ポーラフェイをオーガスタスのところへと連れて歩き出した。

これが、将来夫婦になる二人の奇妙な出会いなのだと思いますが
ら。

8・灰色の悪魔

歩きながらポーラフェイは、随分と大きな人がいるものだと感心した。

体も大きければ、手足も大きい。

しかも、顔は髭だらけ。

髪も後ろで縛っているようだから、相当長いだろう。

髪も髭も土埃にまみれ、茶色とも灰色ともつかない色である。

いや、もともとは灰色がかった色なのかもしれない。

そう思った時ポーラフェイは、ふと自分たちが乗ってきた「愛のローズ号」を思い浮かべた。

正確に言えば、「愛のローズ号」に変化する前の「愛のローズ号」
。即ち「灰色悪魔」を。

大きくて、灰色で、頑丈で。

目の前の人は、あの馬車に良く似ているのだ。

馬車と人が似ているなんて、とても失礼だろうか。

そんなことを思いながら歩いていたポーラフェイの目に、男の側に横たわるトマソンがぴくりと動くのが見えた。

途端、ポーラフェイは駆けだし、目だけできつちりと男に挨拶をすると地面に膝をつき、トマソンの側にかがみこんだ。

すると、後ろから追いかけてきたトゥールの「ポ……、フィー様！」と焦るような声が聞こえてきた。

おそらくトゥールは、「ポーラフェイ王女」としては、駆けだすことも、地面に膝をつくことも相応しくない行いだということを言いたいのだろう。

しかし、今の自分は王女ではない。

王妃の親戚の少年フィーだ。そう思うと、ポーラフェイは感じたことがない解放感に包まれた。

今までならためらい出来なかったことの全てが、今の自分にならできるのだと。

「トマソン」、その声をかけて顔を覗き込むポーラフェイに、「……ご無事、でしたか」と安心したような声で返事が返ってきた。

トマソンにしてみれば、自分はポーラフェイ王女の乗る馬車の御者をしていたわけなのだから、あんなことがあったあとも変わりないポーラフェイの顔を見て安心するのは当然といえよう。

トマソンがもう少し元気なら、ポーラフェイの髪長さや服装に違和感を持っただろうが。

「大丈夫ですか、トマソン」

ポーラフェイはトマソンの手を握る。

トマソンは弱々しいながらも返事をし、ポーラフェイを見る視線にも揺れはなかった。

この分なら、トゥルーの見立ての通り、トマソンは大丈夫だろう。

安心したポーラフェイは、ふと森の中に一頭の馬が繋がれているのを見るとはなしに見た。

おそらくこの男性のものだろうと思ったポーラフェイは、次の瞬間はっとしてトゥルーを呼んだ。

馬を見たことで、自分がすべきことを察したのだ。

「クリスにトマソンを連れ、あなたの馬で国に帰るよう伝えてください」トマソンの様子がもう少しよくなってからですが、と付け加える。

クリスとは、ポーラフェイたちが乗ってきた馬車の御者だ。

「は、はい」

「そして、わたし、僕たちはこれから馬車を追いかけます。トゥルー、御者を頼みます」

そう言うところ、ポラフェイは立ち上がり、改めて深々と目の前の大男に頭を下げた。

「このたびは、大変お世話になりました。貴殿には改めてお礼に伺います。なにぶん今は緊急事態。先を急ぎますので無礼ながら、これにて失礼いたします」

大男を見上げながらポラフェイは、誠心誠意を尽くして言葉を繋げた。

「ちょっと待ちなよ、ぼうや。おまえさん、名前はフィーって言うのか？」

右手で髭を摩りながら男が訊いて来た。

「申しおくれました。はい、僕はフィーと申します。隣国、クレイトン王国王妃の遠縁です。そして先程貴殿の目の前で襲われた馬車に乗っておりますのは、僕の妹なのです」

ポラフェイがトゥールと決めた通りのことを話すと、男は髭をぼりぼりとかいた。

「そうか。それは、これから大変だな。俺は、この森の森番をしているガスだ」

ガスと名乗る男は、ポラフェイというよりもトゥールに向きそう言つと、「それにしても、これは、見逃すことはできねえな」ときっぱりとした声で言つた。

「あんたら、これから馬車を追うんだろ？俺も一緒に行くから」するとポラフェイの背後にいたトゥールが、「え！」と驚きの声をあげた。

その声にびつくりしたポラフェイがトゥールを見ると、トゥールは焦つたように「申し訳ございません」と言つたあともなお、曇つた表情のままだった。

不思議に思うポラフェイの耳に「山ねずみたちじゃ、森を抜けるのは無理だもんな」というガスの声が聞こえた。

「山ねずみ？」

いるんだろ？、山ねずみが。

ポーラフェイはきよろきよろと周りを見渡す。

そんなポーラフェイの様子を見たガスは、あははは、と大声で笑った。

「いや、ごめん、ごめん。フィーだっけ？ おまえさんを見ると、どうも山ねずみを想像して」

なんと。私が山ねずみ。

ポーラフェイが驚いたのと同じタイミングで、トゥルーがゲホゲホと咳き込みだす。

「……トゥルー。あなた、どこか具合が悪いのでは」

どうも先程から様子のおかしいトゥルーを心配したポーラフェイは、そう声をかけた。

「大丈夫です。も、申し訳ございませんっ！」

大丈夫と言う割には、曇った表情を通り越して暗雲立ち込めたような表情になったトゥルーだ。

しかも、涙目。

そんな様子に首を傾げながらも、今、ガスが言った「山ねずみ」についてポーラフェイは再び思いをめぐらせた。

もし姉だったら、自分のことを山ねずみなんて言われたらきつと激怒していただろうな、と。

気は強いが、明るく美しくそして優しい姉のことを思い浮かべると、こんな状況ながらもポーラフェイは少し元気が出た。

それに、自分は「山ねずみ」と言われてもそんなに嫌じゃないなあとも思った。

多分それは、このガスのからりとしたものの言い方によるものだと思った。

この人のものの言い方には、陰がない。

王女という立場にいと、いろんな目的を持ち自分に近づく人がいて、中には二言三言話しただけでも心の底から悲しくなるようなものの言い方をする人がいることも知っていた。

それがこの人にはない。

そのことが、ポーラフェイには好ましく思えたし、更にはこの人を信頼してもいいのではないかという考えにもなったのだ。

更に言えば、ついさっき自分はガスの事を、生き物じゃないものに（……馬車だ）似ていると思ったのだ。

お互いさまと言うよりも、どちらかと言えば自分の方が酷いのだし。

山ねずみ、かぁ。

確かに自分はそうかもしれないと、妙に納得もしてしまった。

「ガス殿。ご同行していただけるのは、森に不慣れな僕たちにとってはありがたいことですが、危険を冒してまでガス殿がそうする理由はないですよ」

そうポーラフェイが言うと、「理由、だって？」とガスが低い声を出した。

その声にトゥルーは「ひい」と小さく声をあげた。

ガスの発言に一々反応するトゥルーに、またまた首を傾げるポーラフェイ。

「理由ならあるさ。この森は俺のもんだから。ここで馬車を襲うなんて暴挙、俺が許すはずないっていうの」

そう言うガスの表情は、どこか愉快そうなものだった。

「俺はそいつらを捕まえる、ぼうやたちは妹を助ける。ここは一致協力していくってことで、どうだ」

そう言って差し出されたガスの手は、ポーラフェイの手の倍以上もある大きなものだった。

9・二ナカーナ

オーガスタスは、甘ったれの貴族のガキだと思っていた山ねずみ少年が思いのほかトゥルーにすっかりとした指示を与えるのを見て、好感を持った。

おまけに、どこの馬の骨ともわからないオーガスタスにまで丁寧な礼を述べてくるような奴でもあり。

人は見かけじゃない、ってか。

立場と見かけが一番離れているのは自分だということはすっかり失念しているオーガスタスは、顎髭を撫でながらふむふむと頷いた。

しかし、こんな十歳にも満たないようなガキが従者は連れているにせよ、馬車で妹(ってことは、妹はいくつだ？ 五歳くらいか？)を追うなんて、どうかしていると思った。

しかもあの従者にしてもどう見ても子どもだし、とオーガスタスは目を細めて改めて従者を見て――そして、驚いた。

ベロニカだ。

しかし、なんで奴がこんなところに。

オーガスタスは、急いで頭を回転させた。

つまりが、この山ねずみは、やっぱり単なる貴族のガキじゃないってことか？

ベロニカにトゥルー、そしてオーガスタス。

まるで誰かに計算されたかのようにここに集められ、そしてこの先もその誰かが描いた道をたどっていくような、そんな薄気味悪さをオーガスタスは感じた。

しかしまあ、今急いで答えを出さなくてもそのうち自然と見えてくるだろう、といつも通りの楽天的に思考に走る。

そこがオーガスタスのいいところといえば、そう言えるのだろう。

「ガス殿」

すっかりオーガスタスの思考から外れていた山ねずみがそう声をかけてきた。

「貴殿には、妹の馬車がどこへ連れ去られたか見当がついているのですね？」

薄茶色の目を真っ直ぐにオーガスタスに向け、山ねずみが訊いてきた。

いい顔だ。自分の頭で物事を考えようとする顔つきだ。

そしてその瞳。嘘のないいい瞳をしている。

オーガスタスは山ねずみの頭に手を置くと、「見当はな」と言っ
てぽんぽんと撫でた。

柔らかな髪に小さな頭。

山ねずみは、もう少し栄養をつけないと立派な男にはなれないと
なあとオーガスタスは思った。

いい男（というか、大人か）になる要素は、十分にあるような山
ねずみ。

そこそこの貴族（もしくはそれ以上？）なのであれば、いつそ、
俺が預かって鍛えてやるか？ とオーガスタスは思いもした。

そして、そこまで考えるなんて自分は相当この山ねずみが気に入
ったんだな、とも思った。

まあ、そのことについても、旅をしていく中でいろいろと見えて
くることだろう、といったものオーガスタスの思考に戻る。

「おまえさんとこって、そこそこいい家なんだろう？」

王妃の遠縁だっていうしなあ、と山ねずみにそう訊くと、「はい」
という返事が返ってきた。

「だよなあ。あんな、この国はな、あんたらが来たクレイトン王国
と多くの場所で隣接しているが、もう一つ、とある国ともお隣さん
なんだよ」

「あ。ニーナカーナ！」トウルーが叫ぶ。

そして、「まさか。まさか、そんなことを」と続けると、絶句した。

「まさかってことはないだろ。連れ去られたのは、妹だろ？ だったらまず間違いない」

その言葉に対しトウルーは、「でしたら、一刻も早く出発を！」とオーガスタスに向って言った。

「トウルー、落ち着いて。僕にわかるように説明しなさい」

山ねずみがぴしゃりとトウルーに言った。

途端にトウルーはオーガスタスが驚くほどしやんとし、「フイー様。ニーナカーナは、婚姻を商売にしている国なのです」と言った。

「婚姻？」

びつくりした顔で、山ねずみがトウルーではなくオーガスタスに向って言った。

「つまり、本人たちの意志さえあれば、誰でも結婚できちゃうってこと」

「誰でも、結婚」

「更に補足するなら、性別、年齢、偽名に関わらず、結婚できちゃうってわけ」

「性別、年齢……偽名？」

まさか、という顔を山ねずみがする。

まあ、それは普通の反応だ。しかし、それだけじゃ、世間は渡っていけない。

「今から一年ほど前になるかな。前の国王が亡くなり、後を継いだのが王の遠い血縁であった今の王だ。彼は、前王の時代にとことん貧しくなったニーナカーナを立てなおすために、とある事業で国の財政を救おうとした。それが、婚姻。つまり結婚だな。ニーナカーナは、どの国からも遠く離れているという地の利と、何の資源もなかったがために他国に放っておかれて、結果どの国にも従属せずに

済んだ利点をいかして、どこの国でも表だっては認めることはできない、しかし確実にニーズはある、本人同士の結婚を認めるという法律を作ったわけ。で、それが大当たりしつつあるのが現状」

まあ、うまいこと考えたよなとオーガスタスは思っていた。

実際、オーガスタスの耳にも、貴族や王族でありながらニーナカーナに行っただという人たちの噂話が入ってきていたから。

そして、ニーナカーナに行く人が増えるということは、ブライアン王国にとっても無関係なことではなかった。

一か月ほど前、ニーナカーナから正式に、とある提案書が届いたのだ。

内容は、ブライアン王国領土にある森の樹木の伐採および、道の整備。

つまりが、ニーナカーナへの道の確保であった。

費用はほぼ全額ニーナカーナが負うと言う。

つまりが、それほどに、儲けが出ているってことなのだ。

なのに、一週間ほど前に来た報告では、何者かが無断で樹木を伐採しているというものがあつた。

そして興味深いことに、その伐採された箇所を線で結ぶと、ニーナカーナへと続くものだったのだ。

国を立て直すつもりで自費で整備の提案をしてきたニーナカーナが、無断伐採をしてブライアン王国を敵に回すとは考えられなかった。

そんな時に起きたのが、今回の用意周到な手口の馬車襲撃。

乗ってたのは貴族のお嬢様だ。

どの程度の貴族かはおいおい知っていくとして、そいつらの目的がそのお嬢様ってことに間違いはないだろう。

ちらりと、山ねずみを見るオーガスタス。

こいつの妹かあ。

いくらニーナカーナでは年は不問だとはいえ、五歳の少女と結婚するなんて変態だとは思えない。

ぞぞぞ、と鳥肌が立つ。

まあ、それだけうま味たっぷりのバックボーンがある相手だつてことなのだろうけど。

それに、視点を変えてみると、行き先がニーナカーナだというのは良い面もあるのだ。

自由な結婚を認めるニーナカーナだが、それ故に婚姻を認めるためにはいくつかの厳しい条件をクリアする必要があったからだ。主なものは、この二つだ。

まず、ニーナカーナでの結婚は、本人同士の同意が必要だ。

仮に、お互いが同意していたとしても、相手のどちらからに酷い傷や乱暴のあとがみられる場合、即刻国外へと放り出される。

更に、花嫁と花婿は結婚までは、清い間柄でないといけない。

結婚前に手を出してはいけないのだ。

誘拐犯としては、少しでも早くそしてスムーズに事を進めたいのだろうから、これらの二つは守られるという確信がオーガスタスにはあったのだ。

ニーナカーナへは、数日かかる。

その間に、なんとか決着をつけたいと思ったオーガスタスだった。

10・侍女は悪夢を見る

ガタン・ガタンと揺れる馬車の中で、リリーは歯を食いしばっていた。

窓の向こうにブライアン王国の城が小さく見え、順調に旅ができよかったとリリーが思ったその瞬間、いきなり馬車のスピードが上がり、そして後ろからは勢いのある馬の足音が鳴り響いてきた。

リリーがポラフェイの手をベンチの肘につかまらせ自分も同じようにしようとしたその時、今度は馬車がガクンと変な揺れかたをした。そして、ドサリという何かが落ちる嫌な音も。

何事かと思い、リリーが室内のあちこちを掴みながら窓の外を見ると、馬に乗った見知らぬ男が馬車の隣を走っていた。

男はリリーに気づくと「声を出すな!」とだけ言い、スピードを上げ馬車の前へと馬を進めた。

――襲われたんだ!

経験はなくても、そう確信した。

さっきの不自然な馬車の揺れは、おそらく御者のトマソンが襲われた音に違いない。

となると、落ちたのも。

想像してリリーはぶるりと震えた。

ブライアン王国の森で強奪がおきた話を、リリーは耳にしたことがなかった。

むしろ、追剥おいはぎや、強盗のなどの怪しい輩の取り締まりに厳しいと聞いていた。

でも、それもどこからの情報で、情報はあくまで情報にすぎない。

ああ、どうしたらいいのだろう、とリリーは歯を食いしばりなが

らも素早く頭を回転させた。

そつと外を見ると、まだ馬車は森の中を走っていた。

とにかくリリーは、馬が何頭いるか（最低でも一頭はある）、相手は何人いるか（御者台に座るものと、騎乗するもので最低二人）を計算した。

目に見えたことと、今の状況を考えてそうだが、先程の馬の足音は一頭だけのものではなかったように思った。

となると、最低でもあともう一頭。リリーは、指で眉間を押さえながら考え込んだ。

そして、もう一頭いたとすれば、それは当然馬車の後ろにいるだろう。

リリーは、馬車内にある何かを（たとえば、服の切れ端とか）、そついったものを窓から投げ、自分たちが事件に巻き込まれたことを知らせる印にしようと思ったが、馬車の後ろに犯人の仲間がいるとすると気づかれる可能性があり危険だと理解した。

では、なにがあるだろうか。今自分に出来ること、助かるために出来ること、出来ること、出来ること……。

呪文のようにぶつぶつと独り言を言うリリーの目の前に、先程自分が確かにしまったはずのカップがすつと差し出された。

そのカップには、レモン水が注がれていた。

「ポーラフェイさま……」

ポーラフェイの優しさと気丈さに、リリーは勇気が湧いて来た。

「恐れながら、ポーラフェイさまのカップを使わせていただくわけにはまいりません」

主人の持ちものを侍女が使っなんて、もっての外だと頭を下げる。

「ポーラフェイじゃないし」

リリーの下げた後頭部に、聞こえる筈のない声が聞こえた。

「でも、王子が使ったものだしたら、なおさら使えないか」

ぎょつとしてリリーが顔を上げると、そこには帽子のベールを上げて馬車の備え付けのベンチの上で足を組む（ドレスなのに！）、

女装したデイビット王子の姿があった。

「な、な、な。ポ、ポ、ポ、ポーラフェイさまはどちらに」

窓の外に馬を見たときよりも驚きながら、リリーは尋ねた。

「ポーラ？　ポーラは、そうだなあ。今頃、馬車にでも乗ってんじゃない？」

そう言うときデイビットはレモン水をくいつと飲み干し、空のカップをコロンと籠の中に入れた。

「ば、馬車に、で、ございますか？」

「うん。おそらく、父上にでも泣きつかれて、僕を追えだとか何とか。で、入れ替わって戻ってこい、とかなんとか」

「お、追って。い、入れ替わって」

まるで、悪い夢を見ているかのような気分で、リリーは目の前の王子の姿を見ていた。

そして悟った。

最初からこのブライアン王国行きを計画していたのはデイビットで、それに自分は加担したことになったのだと。

デイビットは、最初からこの馬車が襲われることを知っていたんだと。

そして、ポーラフェイが王子を追って既に馬車で進んでいるのだと。

じきにポーラフェイは、落ちたトマソンを見つけるだろう。そして何が起こったかをそこで知るだろう。

そして、責任感の強い、ポーラフェイのことだ。助けに来るに決まっている……。

「あのお手紙を拝見した時点で、気がつくべきでした」

リリーは声を震わせながら、後悔しても後悔しきれないとばかりに首を振った。

「ポーラフェイさまが、あんなにきっちり綺麗にぴたーっと端をそろえて、紙を折ることができるはずがなかったんですね」

私は愚かにもポーラフェイさまの上達ぶりに喜んでしまい、本当

のことを見抜くことができませんでした、とリリーは言った。

「え、あれでも上手だった？ 僕、随分下手に折ったつもりだったんだけど」

より一層の研究が必要だな、とデイビットが言った。

「でも偉いよね、ポーラは。自分がとても不器用だって分かっているが、それを直そうと一生懸命だもんね」

「はい。ポーラフェイさまは、常に努力を惜しまない、向上心溢れるお方でございます」

手先が器用でないポーラフェイは、東の国で子どもが遊ぶという折り紙をすることで、指先の器用さを獲得しようとしていたのだ。

「偉い、か。そうなるのかなあ」

そう言うときデイビットは、一瞬悲しげな表情をした。その表情にリリーは驚いた。

と思つたら、今の表情は幻だったかのようにデイビットはケラケラと笑いだし、「ポーラってさ、心のありさまや仕草は淑女系なのに、実際に得意なのはそれとは反対の行為だもんね」と言った。

確かに、ポーラフェイは、針仕事やお料理全般は得意とはいい難かったが、その代わりと言ってはなんだが、鳥や魚をさばいたり、薪割りしたり、大工仕事をしたり、そういったことがとても上手だった。

「人間って、不思議だよねえ」

しみじみとそう言うデイビットに頷きながら、リリーははたと思つた。

「デイビットさま、これから私たちはどこに行くのでしょうか」

ここまで知っているデイビットだ。

この先の展開を知らないはずがない。

「ニーナカーナ」

デイビットはそう言うとき、にやりと笑った。

「二、ニーナカーナですか」

それを聞いたリリーは、顔を強張らせた。

「そう、ニーナカーナ」

そう言ったデイビットの顔は、十四歳とは思えないほどの迫力があつた。

11・森の夜は更けて

御者台に乗るトゥルーは、徐々に暮れゆく空を眺めた。

少し前に灯りはつけたものの、日頃街で暮らすトゥルーにとってそれは十分な明るさとは言えなかった。

とはいえ、大事な王女を乗せている馬車だ。

間違いないようにと、慎重に馬を操る。

少し道が広くなったところで、前を走るオーガスタスに乗せた馬が速度を緩め馬車に――トゥルーのいる御者台に、並んできた。

「一旦、森を出る」それだけ言うと、オーガスタスは再び馬の速度を上げ、馬車の前を走りだした。

……流石に追いつけなかったか。

デイビットを乗せた馬車は今頃どこにいるのか。

トゥルーは眉間にしわを寄せると、オーガスタスの後につき、森から抜ける道へと馬車を走らせた。

「ここの女将は、俺の事情は分かっているから」だからおまえも何も言つなよ、とばかりにオーガスタスはトゥルーに釘を差す。

一行は、森を出てすぐのところにある小さな宿屋の食堂にいた。

この宿屋、食堂はかなり広く、宿屋というよりは食堂としての看板が主なのだろうと思われた。かろうじて、宿泊できる部屋がついているといったような。

そして、少し前まで人がいたであろうという気配も、食堂内にはあった。

宿が見え始めた時点で、オーガスタスは更に速度を上げ一足先にここに着いていたので、先に着くことで人払いなどの手配をしたのだと思われた。

当然、泊まり客も、他には誰もいないようだった。

そのオーガスタスの行動力に、トゥルーは逞しさを感じた。

自国の王女の嫁ぎ相手という目で見れば、それは好ましいものである。

―― 嫁ぎ相手。

トゥルーは、今さっきのオーガスタスの言葉を思い出し、ため息をついた。

つまりが、オーガスタスは自分の身分を彼がフィーと思っている少年に言うな、ということなのだ。

そのフィーこそが、彼の妻になるのだというのに。

ああ、とトゥルーは頭を抱える。

自分は、どこでどう間違えたのだろうか。

あの時は、真実を伝えることが、全てにおいて最善だと思われた。

しかし、現在。果たしてそれが最善だったのだろうか、思わずにはいられない。

ではいつの時点のなら、ポーラフェイに真実を伝えられたのだろうか、と考えてみた。

―― が、しかし。

何度考えても、堂々巡りで、結局は同じ答えに戻ってしまう。

真実の告白をする機会なんてものは、なかったのだと。

……せめて、もう少しオーガスタスが小奇麗にしてくれていたのならば。ならば。

言えた「かも」しれない。……本当に？

うーと唸りながら目をつむるトゥルーに、「はい、どうぞ」と声がした。

トゥルーが目を開けると、ニカが温かなお茶の入ったカップをの目の前に差しだしていた。

トゥルーはシャキッと起立すると、「ありがとうございます」とニカにお辞儀をした。

「な、な、なんですか。座って、座って」ニカはそう言うと、急に落ち着かないような動きをしだした。

「あ、失礼しました。ベロニカ殿。では、いただきます」

トゥルーはそう言うのと椅子に座り、ニカから渡されたカップに口をつけた。

「そういえば、ポーラフェイさまは」

きよろきよろとするトゥルーに向い、ニカは部屋の隅を指した。

「――ぶほっ！」

トゥルーは口に含んだ茶をふいた。

「なんですか。あれ――」大声を出そうとしたトゥルーの口を、ニカが塞いだ。

「し、静かに。あなたにお茶を運ぶよりも、オーガスタスにそうした方が、身分的なつり合いは取れているでしょう」

部屋の隅に置かれた小さなテーブルの上で荷物を広げているオーガスタスは、なんと王女ポーラフェイから、茶を受け取っていたのだ。

「もご、王女が給仕など、もご。もご、今すぐに、私が代わりに、もご」

ニカに口を塞がれたままのくぐもった声でトゥルーはそう言うのと、席を立とうとした。

トゥルーの両肩をニカがぐいっと押さえる。

「なにをするんですか！」

「あ、あなたこそ、なにをするんですか。ここに王女はいないんですよ」

小さいながらもしつかりとした声でニカはそう言うと、黒い目でじつとトゥルーのことを見た。

トゥルーの体から力が抜ける。それを感じたニカは、トゥルーの肩から手をどけた。

「……ベロニカ殿は、この状況をどう思われますか」
トゥルーは訊いた。

ニカはトゥルーを見下ろしながら、「運命だと思います」と言っ
た。

「運命」トゥルーはつぶやいた。

そして、トゥルーは以前にもニカから同じ言葉を聞いたことを思
い出した。

ニカが今の姿になった時、動揺するトゥルーに彼女は同じ言葉を
言ったのだ。

見た目はどうみてもデイビットと同じくらいにしか見えないニカ
だが、本来の姿はデイビットどころかトゥルーよりも上なのだ。

そしてトゥルーの先輩騎士として、この国に仕えていたのだ。

ところが、不幸にも負の魔法を受けたニカは、現在のような少女
の姿となり、そしてその後も成長することなく現在に至る。

ニカの魔法が解けるのか、解けないのか。はたまたこの先のニカ
の寿命はどうなのかは、今のところ一切分からなかった。

国王はニカに十分の保証金と住居を与え、そこで暮らすようにと
促したのだが、デイビットがそれに反対をした。

実は、その負の魔法は本来デイビットに向けられたものをニカが
身代わりに受けてしまったものだった。

それを知るデイビットは、ニカが自分の従者になるよう、国王へ
と願ったのだ。

そしてニカも、どうなるかわからないこれからの人生ならば、デ
イビット王子の希望を叶えたいと従者になることを受けたのだ。

このことを知っているのは、デイビットに国王、そしてその現場
にいたトゥルーをはじめとする数人のみだ。

ニカの家族でさえ、このことは知らない。

公にはニカは、第一王女グレイスランドつきとして嫁ぎ先の国へ
赴き、この国にはいないことになっているからだ。

これ以降、ベロニカは名前をニカとした。

大勢の前ではニカと呼ぶトゥルーだったが、流石に二人で話すと

きはそうは呼べない。

なんといつても先輩だ。しかも腕の立つ。

こうして思いがけない展開で、デイビット奪還への道を進むことになった時も、ベロニカがいるということはトゥルーにとっては大きな意味があったのだ。

そしてとても扱いが面倒ながら、オーガスタスもいる。

このメンバーならば、もし相手の人数が多少こちらよりも多くても、負けない自信は満々だった。

いや、倍でも大丈夫だろう。

とにかく、追いつきさえすれば、どうにか勝ちに持ちこめる可能性は大きいのだ。

油断は禁物だが……。

部屋の隅のテーブルで、オーガスタスがポラフェイに座るよう椅子を差しだしたのが見えた。

再び、トゥルーの腰が浮く。

しかしそこで、ニカの黒い瞳と目が合う。

「運命……ですね」

そう言つとトゥルーは、浮かした腰を元に戻す。

頷くニカの姿の向こうに、オーガスタスがポラフェイに酒を勧める様子が目に入った。

12・優しい思い出

「はやくてあと三日、天候によつてはそれ以上はかかるな」

オーガスタスはそう言つと、フィーが運んできた茶を飲んだ。

フィーからの、ニーナカーナへはどれくらいで到着するか、への答えだつた。

「替え馬もしたいし。あ、山ねずみ、金はあるよな」

すっかり山ねずみと呼ばれることに慣れたようなフィーは、迷いのない声で「はい」と答えてきた。

まあ、そうだろう。金がないはずはないのだ。

自分はあまり手持ちの金がなかったオーガスタスは内心ホツとし、にやりと笑い茶を飲み干し、「金があるなら酒でも飲むか」とそばにあつた酒びんと陶器の器に手を伸ばすと、自分とフィーの前に置いた。

「飲めんだろ？」

そう言つて酒びんの栓を抜くと、オーガスタスはまずはフィーの器にそれを注いだ。

器は小さい。その小ささがフィーに似合っていると、オーガスタスは思った。

フィーはというと、オーガスタスがくいつと淡い黄色の液体を注ぐ様子を見ていた。

「……あ、これは」

フィーのつぶやきを聞きながら、オーガスタスは自分の器にも同じくらいそれを注いだ。

「そう。クレイトン王国の酒。柑橘系ですつきりしていて」

陸のブライアン王国に対し、クレイトン王国は海の国と呼ばれていた。

その海の国クレイトン王国の名産品の一つに、切り立った斜面に

植えられた黄色い果実を使った酒があった。

その酒は、綺麗な色のわりには。

「かーっ！ 効くね」

強い。そう、だからこそこの器の大きさなのだ。

オーガスタスは、フィーにも飲むようにと勧めた。

「おお。あつ、待てよ！ おまえさんにとって、いつから飲んでも良かったんだっけ？」

勧めておきながら、オーガスタスは手で器の上にぱつと蓋をした。

「十七です」

フィーが答えた。

「あ、そっか。悪い悪い」

オーガスタスはそのままそれを掴むと、自分の方へとぐいっつと引こうとした。

「飲めます」

オーガスタスの手の上に、フィーの小さな手がのつた。

「飲めます」

フィーがじつとオーガスタスを見た。

「……山ねずみ、いくつだ？」

オーガスタスが訊くと、「十七才です」とフィーは答えた。

嘘だろ、とオーガスタスと思う。

「生年月日を言ってみろ」

オーガスタスの問いに、フィーはすらすらとそれを答えた。

フィーの言う通りだとすると、彼は確かに十七才である。

そして男にとって、年よりも幼く見えるのはあまり嬉しいことではないというのを、オーガスタスは知っていた。

「それはすまなかった。飲め」

オーガスタスは酒の入った器をフィーに向けて、ぐっと押した。フィーの顔が輝く。

一般的に、その国での飲酒年齢は成人を意味するところが多かつ

た。

しかし申し訳ないが、フィーの外見はおせじにもそうとは見えな
いものだった。

そしてオーガスタスは、いろんな理由から（単に成長の遅さから、
シリアスな原因によるものまで）年相応に見えない人たちを知って
いた。

フィーにもそういつた背景がないとは、言いきれない。
かといって、今の自分の言動をここで謝るのもなんだか違う気も
した。

だからオーガスタスは、そのままフィーに酒を勧めた。
その行為で、自分たちは同じ土俵だな、という意志を表したのだ。

フィーは、くいつとそれを飲み干した。

—— オーガスタスのように。

「……おいしいです」

フィーがしみじみと言う。

オーガスタスは、無言でフィーの空になった器に酒を注ぐと、自
分のものにもそうした。

「いい酒だな」

オーガスタスの言葉に、フィーは嬉しそうな顔をした。

そんなフィーの顔を見たオーガスタスは、ふいについこの間まで
いた寒い国を思い出した。

「俺の母親の国では、赤い果物で酒を作る」

オーガスタスは国だけでなく、そこで出された酒も思い出した。
「すっげえ寒い国だから、酒も湯で割ったり、そのままあったかく
して飲むんだけど。どちらにしても、甘くもするもんだから酒って
感じでもなくてさ」

オーガスタスは自分で話しておきながら、なんでこんな話を初め
て会ったこの少年にしているんだろうと不思議だった。

お湯で割ったり甘くしてもらったのは、少しだけ昔の記憶。

「つまり、ええと、国によって、いろんな酒があるのっていいよな」

オーガスタスが自分でもよくわからない話の終わりをつけると、
フィーはうんうんと頷いた後、「ガス殿には優しい思い出があるんですね」と言った。

「……は？」

や、優しい思い出、だって？ フィーからの答えが、今まで返されたこともないような言葉だったため、オーガスタスは戸惑った。

「ガス殿は、そのお酒をどなたかの手でお湯で割ってもらったり、あたたかくしてもらったり、甘くしてもらったりしたのでしょ」

そうだ。確かに。フィーの言うとおり。

寒くて鼻の頭を赤くしながら部屋に戻ったオーガスタスに、あたたかなそれをくれたのは。

「もう、亡くなったがな」

母方の祖母は、数年前に亡くなった。

三人兄弟の一番下というのが頭にあるせいか、自分よりも背の高くなった孫なのに何かと世話をやきたがる人だった。

こっちがいくら年を重ねても、必ず酒をお湯で割り甘くしたそれしかくれなかった祖母だった。

フィーの言葉で、うわっと祖母との思い出がよみがえり、柄にもなく目頭が熱くなった。

「お亡くなりにな。……そうですか」

フィーはそれだけ言つと、今度はちびりと酒を飲んだ。

そして次の瞬間。

ふわあという小さな欠伸とともに、フィーはスローモーションのようにゆっくりとテーブルにつつぶした。

「お、おいつ。大丈夫かよ」

オーガスタスが声をかけても、フィーは幸せそうな顔をしたまま起きる気配はない。

そんなフィーの寝顔を見ながら、そっぴや疲れてんだろぅな、と

オーガスタスは思った。

山ねずみにしてみれば、まさか妹が攫われるなんて思ってもいなかったことだろうし、しかしそうと知ったからには兄としては追いかけないわけにはいかないだろうし。

フィーの寝顔を見ながらオーガスタスは、酒を飲んだ。

素直な顔だな、とオーガスタスは思った。

善良というか、邪気がないというか。

そして自分が十七だった時のことを思い、顔を歪めた。

決して自分は、こんな顔はしてはいなかっただろうと。

しかし、山ねずみのこの顔も、もしかしたら今回のことで変わるかもしれないとも思った。

ニーナカーナに行くということは、相手の男は山ねずみの妹に何かしらの感情があると推測されたからだ。

「最悪の事態」という言葉が何を指すかは立場によって違うだろうが、オーガスタスにとつてのそれとは「死」だった。

人がいざとなったら思いもよらない行動を起こすというのは、オーガスタスは経験として知っていたからだ。

あまり悲観的なことを考えるたちではないが、事件に女が絡むと「無事」という言葉もなかなか複雑になってくる。

何もなければいい。

フィーの寝顔が、このまま安らかでいればいい。

またまた、自分でも柄でもないあとと自覚しつつも、オーガスタスはフィーのために彼の妹の無事を祈った。

13・自分の仕事

まるで揺りかごにのつたかのような、ゆさゆさとした心地よさを感じた後、ポーラフェイは自分が清潔な敷布の上にそつと置かれるのがわかった。

そして、体の上にふわりと上掛けが掛けられたのも。

ポーラフェイは、上掛けを体にくるりと巻きつけるとその心地よさに体を丸め、ふわぁと欠伸をした。

そしてその柔らかな上掛けに顔をこすりつけると、安心した気持ちになりそのまま深い深い眠りへと、自分が落ちていくのがわかった。

ポーラフェイの心は、とても穏やかで解き放たれていた。

そして、安らかだった。

——「ポーラがお嫁に行くなんて、僕は淋しいな」

その穏やかさを断ち切るように、大好きな弟の声が聞こえ、ポーラフェイは飛び起きた。

デイビットは無事だろうか。

ガスの話によると、ある意味ニーナカーナ行きというのは、「安全」であるという話だった。

しかしそれは、ガスが思うようにデイビットが女の子ならばの話である。

もし、犯人になんらかの拍子でデイビットが男の子、しかもクレイトン王国の王子だと知られたら、また違った話になるだろうとポーラフェイは思った。

クリスとトマソンは、国に着いただろうか。

そして、父は応援を寄越してくれるだろうか。

今そんなことを考えても、どうにかなるわけでもないのだけれど。

そんなことよりも、明日からのことを考えると休むことが大事なのに。

一度覚めてしまった目は、なかなか閉じることができず、ポーラフェイはまんじりともせず夜を過ごしたのであった。

「……頭、痛い」

二カに髪をとかしてもらいながら、ポーラフェイはぼそりとつぶやいた。

「寝不足と、二日酔いでございます」

二カはそう言つと、肩に落ちたポーラフェイの髪を掃つた。

「お召し替えもなさいますか」

いつもなら、髪の毛も服も、王女なのにちやちやつと全て自分でやってしまうポーラフェイだったが、流石に今日はそれも辛そうだった。

「お願いするわ」

痛い頭を抱えながら、これが兄たちがよく言っていた「二日酔い」なのかと、ポーラフェイは興味深く思った。

そしてこんなに辛いのに、兄たちはよく何度も何度も「二日酔い」をするものだとも。

昨夜は、お酒を多く飲んでしまったようだった。

けれど、それも仕方がないだろう。

なにせ、ポーラフェイがあんなにまともにお酒を飲んだのは、昨日が初めてなのだから。

クレイトン王国で作る柑橘系のお酒は、なかなか強くキツイものだったので、ポーラフェイは儀式的に口くらいはつけたことはあったが、あんなにしつかりと飲んだことは、今までなかったの

だ。

勧められたこともなかった。

だから、ガスに勧められた時に——というよりも、ガスのお酒の勧め方には、単にポーラフェイのお酒に対する興味を刺激するだけでなく、何か心に……心の奥の何かに触れてくるようなそんな優しさがあつたために、ついぐいつと飲んでしまったのだった。

お酒を勧める優しさ？

そんな優しさがあるのかどうか随分変な話なのだが、ともかくポーラフェイは、そう感じてしまったのだ。

優しさといえば、ガスの思い出話も優しかった。

不謹慎にも攫われたデイビットのことを忘れ、つかの間の安らかな眠りを得てしまったのは、そんなガスの優しさに触れたからだとポーラフェイは思った。

多分、あの人はいい人だ。

ガスは、森番をしているという。

ブライトン王国は森深き国なので、仕事もさぞかし多くやりがいがあるのだらうとポーラフェイは思った。

現にこうしてポーラフェイたちと行動をともにするのも、自分が守るべき森で人が（デイビットだが）攫われたからだ。

ガスは、自分の仕事を全^{まっ}うする人なのだと思った。

「おはようございます」

ニカと共に食堂に下りていくと、トゥルーが元気に挨拶をしてきた。

ガスとトゥルーも、丁度席に着いたところのようで、出来たての朝食からは湯気がたっていた。

ポーラフェイも二人に挨拶し着席すると、宿屋の女将さんが手際良く二人の目の前に食事を置きだした。

「今日は、天気もいいうだから」

そう言つと、ガスはみな目の前に森の地図を広げ、「ここまで行く」と指で示した。

そして、全行程が晴れだと仮定した場合の宿屋の場所と、替馬をする場所なども細かく説明しだした。

「ガス殿は、早くに起きられたのですか？」

昨晩は用意されていなかった地図や、それに伴う予定を聞くうちに、ポーフエイはそう確信した。

しかしポーフエイの言葉に、ガスは肩をすくめるだけで返事はせず、再び食事を始めたのだつた。

自分の仕事を全^{まっ}うする。

ガスの姿を見ていたポーフエイの頭には、再びその言葉が浮かんだ。

—— 自分の仕事。

はたと、ポーフエイは、気がついた。

今の自分の仕事と、以前のそれとは違っているのだと。

以前は確かに、隣国王子のもとへ嫁ぐのが、自分の仕事だつた。

けれど、今は違う。

ポーフエイは自分よりも美しく、そして賢いといわれる従姉妹たちの姿を思い浮かべた。

隣国との友好のための「駒」は、いくらでもいるのだと。

ポーフエイでなくても、いいのだと。

けれど、今、デイビットに一番近い所にいるのは、自分だけなのだ。

つまり、今の自分の一番の仕事は、弟を、クレイトン王国の王子を無事に奪還することなのだ。

偶然とはいえ、ポーフエイの手元には戦車仕様の馬車と優秀な

騎士たちがいた。

14・婚約者

オーガスタスは馬に乗り空を仰いだ。

運よく今日も晴天である。

そして馬車に、フィーとベロニカが乗り込むのを確認すると、手綱を緩め、トゥルーに合図をしてから馬を走らせた。

馬車には、宿屋の女将が用意してくれた食料やその他もろもろを載せてある。

ほとんど何も持たない昨日の状況とは違い、旅をする用意は万全だ。

ニーナ・カーナのように、何日かかる目的地の場合、それがあ
るかないかで気持ちの上では大きな違いがあった。

そしてその気持ちの違いが、行動にも影響してくることを（特に
旅慣れない者にとっては）、オーガスタスは経験上よく知っていた。

飢えや乾きは、冷静な判断を欠く要因となる可能性を高くすると
オーガスタスは思っていた。

つまり、事の成功確率を高くするためには、その要因を減らすこ
とが大切なのだと。

そんなことを考えながら馬を走らせるオーガスタスの脳裏に、少
しひっかかるものがあつた。

フィーだ。

あの山ねずみみたいな、フィーのことだ。

今朝、昨日までとは違った表情の硬さがにあったからだ。

まあ、もともと真面目そうな奴である。

昨日だって、へらへらとしていたわけじゃない。

ただ昨日は見られなかった、思いつめたような表情を、緊張した顔つきを、フィーがしているのにオーガスが気がついたというだけのことだ。

思うに、今更ながら妹を奪回しなくてはならないことの重大さに気がつき、その責任を感じ始めたというところなのだろうが。

一晩眠ったことで、フィーの頭の中でわさわさとしていた情報が、整理された結果なのだろうと。

フィーの年ごろを考えれば（なんと十七歳だ！）、何事にも責任を感じるのはいいいことだし、また彼の立場としてもそれは正しい姿であると思えた。

しかし、過度の責任感や緊張は、事の遂行に関してはあまりよろしくないものだ。

いい加減になれとはいわないが、ある程度の気持ちの遊び（つまり幅）がないと、小さな失敗に心がくじけ、大きな問題を解決できないままに自滅してしまうからだ。

そういう視点で言うと、フィーの様子はちよいと危つい。

どうしたもんかなあ、とオーガスは思った。

そして、それとはまた違った視点で、フィーが思いつめた顔をするのが残念だと思う自分がいたのだ。

こいつには、そんな顔は似合わない。

……ふむ。

では、どんな顔が似合うというのだろう。

そこまでオーガスは考えた後、まあいいや、とその思考を放

棄した。

旅はまだ続くし、そうなんでもかんでも急いで答えを出さなくてもいいだろうと。

森の木々の間から降り注ぐ日差しを受け、オーガスタスは黙々と馬を進めた。

影になったり、明るくなったり。
そんな変化を楽しみながら。

何度かの小さな休憩をとったあと、オーガスタスは馬車の御者台に座るトゥルーにそれまでとは違った合図を送った。

その合図にトゥルーは頷き、馬車の速度を落とし始めた。

目の前に光のさす、今までの休憩場所とは違った開けた場所が見えてきた。

そこは、オーガスタスが決めた昼食のための休憩地点だったのだ。

オーガスタスが馬車から荷物を取りだすと、受け取ったトゥルーはそれをてきぱきと敷物の上に置いた。

そしてその置いた荷物を、ベロニカとフィーでときはじめ、あつと言う間に昼食の用意ができた。

パンに薫製した肉や果物が並ぶ。

飲み物としては、ブライトン王国でよく飲まれる軽い口当たりの

酒が出された。

四人は静かに食事を始めた。

そういえば、よくしゃべる人物は、今回の旅にはいないなあとオーガスタスは思った。

まずトゥルーは、自分が話しかけない限り話してこないだろうと思ったし、ベロニカはベロニカでいろいろと思うところがありそうだし。

オーガスタスは、燻製肉を頬張りながら、フィーを見た。

先の二人はともかく、こいつは少しくらい何かしゃべってよさそうなもんじゃないかと、オーガスタスは思ったからだ。

「山ねずみ」

オーガスタスがその声をかけると、フィーは小さな顔をぱっと上げ、真っ直ぐにオーガスタスを見てきた。

—— ああ、この瞳、とオーガスタスは思った。

王子という立場である自分には、なかなか向けられないものだと。

また、王子の立場を隠した自分にも、また違った意味で縁はないものだと。

立場があると媚びや諂いや打算が入り、ないとオーガスタスの身なりで判断され見下される時もある。

または、自分の評判を聞いている……恐怖。

オーガスタスは目を伏せた。

「ガス殿、どこか具合が悪いのですか？」

フィーが心配そうな顔で、オーガスタスを見つめてきた。

思わずオーガスタスは手を伸ばし、フィーの頭をわしゃわしゃと

撫でた。

「ポ……」

トウルーが何かを言いかけたと思ったら、その口めがけてベロニカが果物を突っ込んでいた。

「果物が召し上がりたかったのですね、トウルーさま」

トウルーは目を白黒させながら、大きく頭を上下に振った。

その様子を見ていたフィーは自分の前に置いてあった果物を、そつとトウルーの前に置いた。

フィーがにこりとトウルーにほほ笑む。

すると、トウルーは顔を赤くしてもごもごとお礼を言いだした。

……こいつ、やばくない？

オーガスタスは、フィーの笑顔に顔を赤くしているトウルーを見ながら思った。

男を見て顔を赤くするなんて、と。

「ガス殿も、果物を召し上がりたいのですね」

「え、俺？ 俺は別に」

なんでそんな話になるんだと不思議に思うオーガスタスをよそに、フィーはトウルーの目の前に置いた果物を取り「半分ずつにしましょう」と言つと、それを手でぱつくりと二つに割り、半分をトウルーの前に置き、もう半分をオーガスタスの前に置いた。

「いや、これは」

オーガスタスが戸惑いながらも半分になった果物を取りフィーに返そうとすると、「ガス殿、ちょっと怖い顔になっていましたので」という言葉がきた。

「怖い顔？」

「はい。ぼくがトウルーに果物を渡していたら、そんな顔をなさつ

ていました」

「いや、だから、それは」

山ねずみを見て顔を赤くするトゥルーを見て、おや、と思ったからであつて。

あまり面白くない気持ちになつたからであつて。

——面白くない気持ち、だと？

待て。俺。

「は、ははははは」

オーガスタスは、まさかまさかそんなアホなど、ともかく笑つた。

待て、待て。

そんなはず、ないだろう。

男ばかりの中で過ごすことも多かったが、今の今までそんな気配は全くなかつたんだから。

……待て、待て。

気配、だなんて言葉を容易に使うんじゃないよ。

そういつたことがあるのは否定はしないが、俺は違つんだから、断じて。

それに。

「婚約だつてしているわけだし」

そうだ、ちらりとも見たこともない相手だけれど、スチュアートが白髪を振り乱しながらも「素晴らしい」と褒めまくっていた、隣国の王女が俺にはいるわけで。

あのスチュアートが褒めるんだから、相当「素晴らしい」王女な

んだと思うし。

才色兼備なのだろう。

今まで付き合いのあった女性の、いいところ全てを集めたような

オーガスタスは、ふうと息を吐くと、やれやれと酒を手を取った。

が。

今度は、オーガスタス以外の三人が、それぞれの表情を浮かべながらオーガスタスのことを見ていたのだ。

トウルの顔は、真っ青だ。

さっきまで赤くしていたいたはずなのに、忙しい奴だと思った。

ベロニカは無表情だった。

ことの成り行きを、じっと観察しているような顔だった。

そしてフィーの顔は、まるで鳩が豆鉄砲を食らったようなものだった。

小さな顔に、驚きの表情を浮かべていたのだ。

「……結婚されるんですね」

おめでとうございます、とフィーが言った。

するとトウルが、凄い勢いで咳こみだした。

その背中をベロニカが摩っている。

「あ、結婚。ああ、まあ。……うん。あ、ありがとう」

言っちゃったのか、俺。

言っちゃったなあ、俺。

15・婚約者 その2（前編）

「婚約だっでしてしているわけだし」

ガスの言葉に、ポーラフェイはびっくりした。
ガス殿には、婚約者がいる！

なんと！ 自分と同じ境遇ではないか、と。

驚きながらも、礼儀正しいポーラフェイは、しっかりと祝いの言葉をガスに伝えた。

それにしても、とポーラフェイは再び思った。

婚約者のいる人物が、ここに二人。

これも何かの縁なのだろうと。

「あの、ガス殿」

ポーラフェイの声かけに、ガスは大きな体をびくりと震わせた。

「婚約者殿は、どんなかたなのですか」

縁だと思つと、ガスの婚約者がどんな女性なのかポーラフェイは知りたいと思つたのだ。

その発言の裏には、自分は今「フィー」だという意識もあつた。

ポーラフェイでは訊けないことでも、少年であるフィーなら訊けると。

すると、ポーラフェイの質問に、トゥルーが噴いた。

「大丈夫ですか？ トウルー」

白い顔をしながら、トゥルーがむせている。

むせながらもトゥルーは、大丈夫ですと答えるように、頷いている。

—— 昨日といい、今日といい、トゥルーの様子は変だ。

いつもは穏やかで、もう少し落ち着いた人物だった気がするのに、とポーラフェイは不思議に思った。

すると、「お酒をどうぞ」と、二力がトゥルーに器を差し出した。

「いや、しかし。いや、でも」

トゥルーは、ガスとポーラフェイを交互に見ながら目を白黒させていた。

そして、今度は口をパクパクしだして――。

「どうぞ」

心なしかいつもより凄みのある二力の声に、トゥルーは頂垂れたようになりつつも器を取り、それをぐいっと飲み干した。

「ああ。喉が渴いていたんですね」

その様子を見たポーラフェイは、納得した。

トゥルーの白かったその顔は、酒のせいか若干血色が良くなっていた。

もしかすると遠慮をしていたのかもしれない、とポーラフェイは思った。

御者としての役目を果たすために、喉が渴いたのに飲まなかったのだと。

トゥルーが酒に弱いとは、聞いてはいなかった。

更にこの酒は、水代わりともいえるかなり弱いもので、ポーラフェイでさえ気軽に飲むことができたものだった。

ということは、トゥルー本人の真面目さ故の節制なのだろうと考えられた。

そういえば、果物も欲していたトゥルーだった。

これは迂闊だった、とポーラフェイは思った。

酒以外の水分が、トゥルーには必要だったのだと。

宿屋から生水は持ってきたものの、傷みやすいとの理由で、ポー

ラフエイ用のものとして少ししかなかったからだ。

しかも、その水にしても、二カから渡されたものだった。自分で必要だと思い用意したものでは、なかった。

朝、起きた時には、既に旅の用意はされていたのだから。

つまり、ポーラフエイがしたことといえは……。

—— したこと。

そもそも、そんな発想すらなかったのだ。

旅に必要な飲食やその他諸々の用意を自分がする、だなんて。

今までだって、やってせいぜい身の回り品の用意だ。

それすら止められることも多かったくらいだから、それ以上のことを求められたこともなかったし、また自分から何かをしようと考えたこともなかった。

「おい、山ねずみ」

ガスの声にポーラフエイは、はっとした。

ガスはポーラフエイの顔を見ると、酒をぐつと飲んだ。

そして二度ほど頷くと、「俺の婚約者はだなあ、美人だ」と大きな声できっぱりと言った。

そうだ、今はその話をしていたのだとポーラフエイが意識を戻すと、またもやその意識をふき飛ばすかのようなむせた音をトゥルーが発した。

すると、またかいがいしくも、二カがトゥルーの背中を摩りだした。

そして、またまたトゥルーも大丈夫ですと言うように、ポーラフエイに向って頷いた。

そんなトゥルーの様子にはお構いなしに、ガスは更に「彼女は、

頭も良くて、背も高く……髪は金色で目は青い」と続けると、ふむふむと再び大きく頷いたのだった。

しかし、そのガスの言葉が言い終わらぬうちに、突然「うぉー！」とトゥルーは叫んだかと思うと、立ちあがった。

そして、その様子に呆氣にとられたポーラフェイには、ガスの「髪は金色で目は青い」という発言は聞こえなかったのだった。

「お……おい、大丈夫か？」

流石にガスも、そうトゥルーに声をかけた。

トゥルーは肩で息をしたあと、ゆっくりと呼吸を整え、咳を一つすると座り直し、「失礼しました。いやあ、それにしても、今日の天気はなんていいのでしょう、ガス殿！」といきなり天気の話題をしてきた。

話を振られたガスも、「うん、そうだなあ。しかしなあ——」とトゥルーとこれからの天気の予想について話し始めた。

ポーラフェイは、二人のする天気の話は聞いていなかった。

あまりにもおかしいトゥルーの行動に戸惑っていた。

トゥルーは、兄王子ドミニクの騎士の中でもとりわけ優秀で、兄の留学先にも同行をしたほどの人物であった……はずだ。

「フィーさま、ご心配なさらず」

小声でも尚且つ律儀に「フィー」と呼ぶニカが、そう言った。

「恐らく、浮かれているんです」

ニカの言葉に、ポーラフェイは「浮かれている？」と繰り返した。

するとニカは、体を少し捻りポーラフェイから顔を逸らすと、「実は私たち」と言っただけで黙ってしまった。

ポーラフェイは、はっとした。

その台詞は、「全クレイトン王国国民が泣いた！！」とのうたい文句で爆発的人気を誇る、とある演劇の有名な台詞だったからだ。

15・婚約者 その2（後編）

ポーラフェイも父王と兄王子ジェフリーと共に、観劇をした。

泣いたり笑ったりと大騒ぎの二人に挟まれ、劇をまともに観るどころではなかったのだが、この有名な場面は流石に心に残っている。

それぞれの国の使命のために王子と王女という身分を隠しながら行動する二人が偶然出会い、お互い惹かれ、そして別れ……、しかし本来の自分たちの姿に戻り、再び会うことができた場面で、この台詞は出てくるのだった。

劇の中では、「実は私たち」に続く台詞は、「恋仲なのです」というものだった。

山あり谷ありだった二人の運命も、その台詞にて大団円といった具合で、幕は閉じたのだった。

だからきつと、二力の次の言葉は「恋仲なのです」と続くはずなのだ。

しかし、ポーラフェイの口からは（いくら今はフィーだとしても）恥ずかしくて「恋仲」などという単語を口にすることはできない。

二力がそう言うてくれれば助かるものの、二力はそれつきり黙ったままだ。

そろりそろりとポーラフェイが注意深く二力の顔を覗き込むと、なんと二力の顔は赤かった！

それを見て、ポーラフェイは納得した。

つまり二力とトゥルーは、そういった間柄なのだと。

そして、今回は共に行動することが多く、それによりトゥルーは浮かれて行動が変になってしまったと。

恋とは、人をこんなにも変にしてしまうものなのだとポーラフェ

イは知り、驚いた。

しかし、こう言っては何だが、二人は随分年が離れているようにも思えた。

まあ、でも年の差なんていうものは、年を重ねるにつれ気にならなくなるものだ、いろんな夫婦を思い浮かべながらポーラフェイは思った。

ポーラフェイにしても、相手の王子とは四つ離れているのだから。

そもそも、四つくらいなら、離れているとは言えないだろうが。

そういえば、ガスはいくつなのだろうかと、ポーラフェイは思った。

そして婚約者は。

ポーラフェイの頭の中は、再びガスの婚約者の事で一杯になった。

—— 美人で頭も良くて背も高い。

それはまるで、姉王女のグレイスランドを表す言葉のようだった。

遠く離れた国で、姉王女は立派な国母として既に子も成していた。

「ガス殿は、お幸せですね」

ため息をつきながら、ポーラフェイは言った。

そのポーラフェイの声は小さなものだったが、その場にいた三人にはばつちりと聞こえた。

「あ、あの、ガス殿！ 婚約者殿は、心配ではないでしょうか。ガス殿がこのように突然出立されたのでは」

今更ながら、そのことに気がつく。

自分たちは、このことを御者のクリスに言付けていた。

しかし、ガスがそんなことをしたような気配はなかった。

ガスはあの場で、二ーナカーナ行きを決めた。

当然、ここにすることは、婚約者は知らないに違いないと思った。

「大丈夫だ」

するとガスはそう言い切った。

「つまり、あれだ。……ええと、そう。婚約者は俺を信頼している
ので、多少連絡が取れなくても大丈夫なんだ」

ふむふむそうそうと頷きながら、ガスが答えた。

—— 信頼。

なんてすばらしいの間柄なのだろうと、とポーラフェイは思った。

そして、考えた。

自分も婚約者である隣国の王子と、そのような関係が築けるのだ
ろうか、と。

お互い信頼しあえる関係を。

信頼。

ポーラフェイは、無然とした。

自分の結婚は、いわば国と国との約束事だ。

だから、当然ある種の信頼は存在するだろう。

信頼に基づく婚姻だからだ。

けれどそれは、ガスの言う信頼とは違った色を持つものだ。

ガスは、「婚約者は俺を信頼している」と言った。

それは個人と個人の関係だ。

しかし、ポーラフェイのそれは、国と国との関係だ。

そこには、隣国王子とポーラフェイの個人的な関係は、入り込ま
ないのだ。

むしろ入りこんではいけない、関係なのだ。

ポーラフェイは、心がざわざわとした。

散々、兄や姉の結婚を見てきたはずなのに、ガスのような視点でその関係を見たことはなかったからだ。

あの、お騒がせな兄王子ジェフリーも、考えたら国同士の思惑のもとの義姉ローズと結婚をしたのだ。

あまりにも明るい二人なので、ついついそういったことを忘れていたが。

本来なら姉王女のグレイスランドに、いろいろと話を聴けたのだろうが、なにせ年が離れているためにそんな機会もないまま姉は嫁いでしまっていた。

今まで、なんら疑問にも不安にも思わなかった自身の婚姻について、ポーラフェイは少し不安になってきた。

「どうした、山ネズミ」

心配そうな顔で、ガスがポーラフェイの顔を見ていた。

「実は、僕にも婚約者が……」

ひい、という声とともに、トゥルーがまた立ちあがる。

「お、おい」さっきから変だぞ、とガスは言いながらトゥルーを座らせた。

ポーラフェイもトゥルーに落ち着くように目で訴えた。

「ですから、ガス殿のように信頼しあえる関係は、すばらしいなあと思います」

ポーラフェイの言葉に、ガスは唸った。

「随分と長いお付き合いなのでしょうね」

すると、ガスは喉の具合が悪くなったのか、咳を二度ほどした。

「ああ、まあ、うん。お、幼なじみなんだ」

「幼なじみ」

それはいいですね、とポーラフェイが言うと、ガスは小さな声で、
おう、と答えた。

「で、山ねずみの相手はどんな奴だ」

ガスが訊いてきた。

ポーラフェイは、兄から聞いたことを思い出しながら答えた。

「そう、ですね。勇敢で、勉強熱心で、あと……大きい、と」

そうそう、そんな話を兄はしていたと。

「……大きい？」

ガスが繰り返す。

「はい、大きいです」

確か兄はそう言ってた、ブライアン王国の第三王子は体が大きい
と。

ポーラフェイの返事に、ガスがにやりと笑った

「そりゃ、いいなあ」

「……そうですねえ」

「いろいろと楽しめるだろうし」

ガスの言葉に、トゥルーとニカの動きが止まった。

不穏な空気を感じつつもポーラフェイは、「そうですね。いろいろ
と」と意味もわからずそのままを繰り返した。

すると、「あゝ！ ガス殿！ ガス殿！ お天気、お天気ですよ
！ 明日は、どうでしたっけ！ 明日は、ええと、雨？ あれ、曇
り？」

トゥルーがガスに覆いかぶさるようにして、再び天気の話を出
した。

その勢いに、ガスだけでなくポーラフェイもぎょつとした。

「フィーさまは、どう思われます？ 明日のお天気について」

ニカも天気が気になりだしたのか、ポーラフェイにそう訊いてきた。

ポーラフェイは少し考え、「晴れてくれるといいですね」と答えたと、ちらりトウルを眺め、恋をするとあんなに変になつてしまふのなら、自分はする機会がなくてよかったのかもしれないと思つた。

16・雨の日の過ごし方

やたらと天気の話をしたから、というわけでもないだろうが、時折見える森の空は徐々に雲が厚くなってきた。

オーガスタスは宿までの道を頭の中で再確認すると、後ろを走るトウルーに振り向かずには急ぎの合図をした。

ブライアンからリーナカーナまでは、比較的平坦な道が続く。

だからこそ、道を広げての往来は理にかなうのだが、天気に関してはそうでもなかった。

平地の密に生えた樹木の中では空が見えにくく、空気の湿り具合や風の温度や匂いで天気の行方を計るしかないからだ。

休憩所が必要だな。

道づくりに併せて、適当な場所にそれを作るのが望ましいと。

オーガスタスは、この道で休憩所を開けそうな宿を何軒か頭の中で挙げた。

どうせなら、特色をつけるのがいいだろう。

飲み物、食べ物。

オーガスタスは、今走る道の未来を考えた。

それは楽しいことだった。

森を抜け宿についた直後に、大きなたらいをひっくり返したような激しい雨が降り出した。

音を立てながら降る雨に、フィーがびつくりした顔で外を見た。到着が少しでも遅れていたら、まだあの雨の中だった。やれやれ。

雨は、馬と人に大きな疲労を与える。特にこんな大雨だと。それでなくても、ぎりぎりのところで走らせている馬たちには疲労の色が見えていた。

馬は、次の宿屋で替える予定だ。もうひと頑張りしてもらわないと困る。

フィーはまだ、外を眺めていた。

「ガス殿」

「ん、どうした」

フィーの沈んだ声に驚いた。

「この雨の中を進むのは大変ですよね」

「まあ、そうだな」

馬車も馬もぬかるんだ道を走るわけだから、下手をすると横転なんてことにもなりかねない。

馬ばかりか、人も怪我をすることもある。

「妹たちが心配です」

フィーの言葉に、オーガスタスは唸った。

確かにそうだ。

あまりの大雨に、自分たちが無事に宿についたことで良しとしていたが、そもそもこの旅はフィーの妹を助けるためのものだ。

妹を心配するフィーに、森のことをよく知るオーガスタスだからこそ、「大丈夫だ」とは言えなかった。

今、この瞬間も、もしかしたらフィーの妹たちは森の中で立ち往生しているかもしれないのだから。

だからといって、自分たちに何ができるかといえば、何もできな

い。

わかっていても、どうしようもないこともある。
それに遭遇した人たちが、その場でどうにか活路を開くしかない
ときもあるのだ。

「辛いな」

そしてこんなとき、かける言葉がないのも知っていた。

オーガスタスがぼんぽんとフィーの頭をはたくと、フィーはオー
ガスタスのその手を取り、ぎゅっと握ってきた。

小さな手だった。

フィーの視線は、雨の中に定められたままだ。

オーガスタスはフィーの手を振り払わなかった。

二人の手は繋がれたまま、フィーの頭からするりと脇へと下りた。

オーガスタスは、フィーの手を握りなおした。

そして、フィーの気がすむまで共に雨の森を眺めたのだった。

翌朝も雨だった。

オーガスタスは、徒歩で森の入り口付近まで様子を見に行った。

先日の大雨とは違い随分とその降りは弱く、あと数時間で止むこ
とを示していた。

とはいえ、道はぬかるんでいる。

—— 行くか、留まるか。

確実なのは、今日は宿に留まり明日出発することだ。

しかし、フィーとしては少しでも前に進みたいところだろう。

しばらくオーガスタスは、森の中を歩いた。
それからおもむろに宿に戻った。

「もう一泊ここで世話になる。出発は明日」

朝食で集まった面々に向い、オーガスタスは先程決めたことを伝えた。

「はい」

一番最初に返事したのは、フィーだった。

自分たちの主の決定に従うかのように、ベロニカとトゥルーも頷いた。

フィーからの反論はなかった。

そーいう奴だよなあ……こいつは。

文句の一つでも言ってくれば（勿論言われるのは面倒だが）、こちだつていろいろと悩んだ末の結論だと説明もできるし、なにによりフィーにとつても気持ちの切り替えといつか気持ちを吐きだすことにもなるだろう。

あれだけ昨日心配していたのだから、今だつて本当は飛んでも妹のところに行きたいところだろう。

自分の判断には後悔はないが、なんだかフィーをいじめているようなそんな気にもなった。

「よし、山ねずみ。剣の稽古でもするか」

こんなときは、うじうじ考えずに体を動かすに限る。

宿の裏には、大きな庇のついた作業場がある。

あそこですっきり動いて、腹をすかせて、たらふく食べて、ぐっすり眠れば、明日なんてすぐだ。

「……剣術ですか」

ほお、といった顔をフィーはした。

「あ、あの、フィー殿はですね」

トゥルーがなんと言っているのかわからないような表情を浮かべ、オーガスタスとフィーの二人を交互に見ていた。

「なんだ、自信がないのか」

まさか、その年になってできないってことはないだろうと、オーガスタスは訝しがる。

「フ、フィーさまの、ご両親の教育方針で、フィーさまは学問を中心に……でして」

トゥルーの言葉に、オーガスタスは眉を上げる。

「……できない、と」

本人に確認するかのようにオーガスタスは訊く。

フィーは頷いたものの、その顔を上げるときふいに顔を明るくした。

「ガス殿、ぼくにも得意なことがありますて」

珍しく、フィーはうきうきとした表情をガスに向けた。

「ほう、是非聞きたいね」

俺は親戚のオヤジか！ と自分の声色に突っ込みを入れる。

こりゃ、いくらなんでも優しすぎるじゃないかよ、と。

「マキワリです」

「……え、なんだって？」

今、マキワリと聞こえたが、マキワリとは薪割りだろうか。

「あの、木をパカーンと斧で割る、薪割りです」

「ああ、木をパカーンと斧で割る……っておまえさんがか？」

驚くオーガスタスの前で、フィーはにこにことした顔をしていた。

17・薪割り王女

ポーラフェイは、他の兄弟姉妹と違いおとなしく穏やかな性格だ。

しかし、おとなしいからといって、室内でのこまごまとした作業――たとえば、縫物だとか織物だとか、そういったことが得意なのかといえば、否だ。

とはいえ、努力家でもあるポーラフェイは、なんとかそれを克服したいと、東方の国から伝わる紙遊びで指先の器用度を高めようと練習を始めたのだが、どうもうまくいかない。

四角い紙の端と端をきっちり重ねて折り進めることで、なにがしの形を作る遊びなのだが、そのきっちり重ねるのが苦手なのだった。

なんどやっても不格好なものが折れてしまうポーラフェイに比べ、一度見ただけでぴたりとするように折ることができるデイビットに感心したり落ち込んだり。

まあ、そんな具合であつた。

では、いったいポーラフェイは何が得意なのかというと、意外にも屋外での作業だった。

薪を割つたり、庭木に水をやったり、土を掘りおこしたり、虫の駆除をしたり。

虫に関しては、従姉妹たちがなぜあんなにも怖がったり逃げたりするのかわからなかった。

（ちなみに、姉王女であるグレイスランドも、虫ごときでは動じなかったという話だが）

庭でお茶を飲んでいるとたまに小さな虫がその中に入ってしまうことがあるのだが、従姉妹たちはいちいち騒ぎ、その度にお茶をかせさせていた。

その横でポーラフェイは黙って指でぱつとそれをすくうと、ぱいと捨てていた。

勿論、毒がある虫は注意したが、それ以外は特になんとも思わなかった。

まあ、年中何をしでかわからないデイビットの「お世話」という名前の「尻拭い」をしていたポーラフェイだったので、自然に虫にも免疫ができたのだろう。

とはいえ、庭木の世話では虫は都合が悪いことがあった。

そんな時は、薬をまいたり、手作業で駆除したり。

比較的子どもに対して大らかな国王夫妻も、王女が虫の駆除をするのはどうかと思った時期もあったようだが、まあ、それも個性だろうと（ポーラフェイが小さなころは今よりも公務が忙しく、なあになあになったというのが本当のところだろうが）黙認することにした。

そんなわけで、おとなしくも色白ながら（そこらへんは歴代の侍女が手腕を発揮した）外仕事の経験値はしっかり増えていったポーラフェイだった。

あ、いい斧がある。

薪割りをするために、ガスとともに来た作業場で、ポーラフェイ
はいい塩梅の斧を見つけた。

宿屋の女将が使っているものだろう。

小ぶりで、扱いやすそうだ。

「おまえさん、本当にできるのか。その……」

みなまで言わないところが、彼の優しいところなのだろう。

一緒にいればいるほど、この人の良さは伝わってくるとポーラフ
エイは思った。

しかしどういうわけか、ガスはポーラフェイが薪を割ることに対
し、非常に疑わしく思っているようでもあった。

「あのお、ガス殿は、薪割りはなさらないんですか？」

もしかしてそういった理由なのだろうかとポーラフェイが訊くと、
「は？ 俺はするよ。するけどさあ、おまえさんは、なんていうか」
との歯切れの悪い答えが返ってきた。

はたと、ポーラフェイは動きを止めた。

そういえば、兄や従兄弟（および従姉妹）が、薪割りをしている
という話は聞いたことがなかった……気がする。

さっきは、つい自分にも得意なことがあるということを示したく
て、あんなことを言ってしまったが、もしかや失敗だったのだろうか。

薪割りは、一般的ではないと。

とはいえ、既に斧も薪も目の前にあり、散々自分は薪割りができると言ってしまったのだ。

今更、やめるほうがあやしまれる。

たとえ、薪割りが一般的でないにはせよ。

——もう、やるしかない！

第三者から見れば、実はできませんでした、ということにしても全く問題のない展開なのだが、真面目なポーラフェイゆえにつき進む道を選んだ。

ポーラフェイは薪をいくつか選ぶと運び、その中の一つを台座の上に載せた。

斧を持ち、側まで近づくとまずは軽く薪の中心にあて、距離をはかった。

うん、大丈夫そう。

薪はいい具合に乾いているし、斧は握りやすい。

ポーラフェイは少しだけ斧を振り上げると、そのままストーンと体重をかけてふりおろした。

薪はすつと裂けるように割れた。

「へえ、うまいもんだなあ」

感心したようなガスの声がした。

その途端、ポーラフェイは心の底から嬉しいという気持ちがぐぐぐと湧きあがってきた。

ガスに褒められるのが、なんだかとても嬉しかったのだ。

ポーラフェイはにつこり笑うと、次々と薪を割り出した。

ポーラフェイは薪割りが好きだった。

余計な事を考えずに、ただ目の前の薪と自分がふりおろす斧だけに気持ちがいけたからだ。

そこには、なんのしがらみもない。

それがとても楽しかった。

「うん、見直した！」

ガスはそう言くと、ポーラフェイに冷たいの飲み物を渡した。

「ありがとうございます」

いろんな意味を込めてお礼を言ったポーラフェイは、それを一気に飲み干し。

「お、おい！　大丈夫かよ！」

ガスの焦る声を聞きながら、ポーラフェイの世界はぐるりと回った。

18・三番目の王子の役目

シュシュシュと削られた木くずは、足元に広げたぼろ布の上に落ちた。

オーガスタスは、ちらりと側の長椅子を眺めた。

そこには、張り切って薪割りをした拳句、果実酒（しかも思いつきり薄いやつ）を一気に飲んでぶっ倒れたフィーが寝ていた。

さっきまでいたベロニカやトゥールーは、人出が足りないとかで宿屋の女将に駆り出され労働中だ。

ということで、フィーの側にはオーガスタスしかいなかった。

オーガスタスは、拾った枝を削っていた。

小刀を使い器用にその枝の中から、形を彫りだしていた。

何はなくても、こうした小刀はいつも身近にあったので、結果としてはそれを使うのも上手くなったのだ。

それにしても、と再びフィーを見る。

本当に、よく寝てるなあ。

いや、倒れている、か？

フィーの寝顔を見ながら、さっきの笑顔を思い出した。

薪割りを褒めたくらいで笑うなんて。

十七歳のフィー。

六年前のあの戦いとき、フィーはまだ子どもだったのだ。

そう思いつつ、自分だって充分に子どもいえる年だったのだと苦笑いをした。

今から六年前の十五のとき、オーガスタスは戦場にいた。

オーガスタスは三番目の王子で、しかも兄たちに比べると体つきも良く武術にも長けていたため、ブライアン王国の旗振りとして戦場に向かわせるには最適な人物だったのだ。

父王は、オーガスタスの命を士気を高めるために使った。

オーガスタスにしても、王族が率先して戦場へ向かうことの意味も意義も承知していたため、なんら異議はなかった。自分が捨て駒だという意識も、勿論あった。

オーガスタスは、期待以上の働きをした。

国民は、その若くしなやかで勇ましい姿に熱狂した。

若き王子はその容貌と戦場での姿から、「灰色悪魔」と相手国から呼ばれ恐れられ始めた。

十五歳の少年とは思えない姿に、みんなが震えた。

—— あんな王子のいる国とは戦いたくない。三番目であだとしたら、その上が出てきたときはどうなるんだ。

兄弟の実情を知らないものはそう口に始めた。

戦いは、オーガスタスが戦場に出て半年で終結した。

そして気がつけば、「灰色悪魔」という名前が独り歩きしていた。

オーガスタスの預かり知らぬ略奪も残虐行為も、全ては「灰色悪魔」のしたことになっていたのだ。

戦いが終わったのちも、オーガスタスの「戦い」は終わらなかった。

あるものはその強さに憧れ必要以上に媚びへつらい、あるものはオーガスタスの姿を見るだけで恐ろしさに震え、またあるものは利

用できる王子として近づいてきた。

ブライアン王国の王子としてはとても価値ある存在となったオーガスだが、十五歳の少年としては背負いきれないものを負う結果となった。

戦後、父王は病に倒れ、長兄が国王として国を治めることになった。

オーガスは長兄のはからいにより、表舞台から姿を消した。兄は、オーガスを好意的に受け入れてくれる国へと彼を留学させたのだ。

国の情勢が落ち着くにつれ、人々の間からは徐々に「灰色悪魔」の記憶も薄れていった。

有事にこそ必要な「灰色悪魔」は、平時においては戦争を思い起こす負の存在でしかなかったからだ。

オーガスは、その間勉学に励んだ。

そしてその中で、自国の国土の多くを占める森林の利用について興味を持ったのだった。

オーガスは、今でも夢に見る。

奪った命。

奪われた命。

だからこそ、余計に森に惹かれたのだと思った。

幼い頃から森は身近で、よく遊んでいたオーガスだったが、学びを深める中で森の意味と大切さを知ったのだ。

森は、命が生まれる場所だ。

昏々と湧きでる水。

雨水をろ過する土壌。

新鮮な空気を産む森林。

朽ちた木から出る新芽。

そこで暮らす多くの生き物。

繋がっていく命。

命の終わりは「終わり」でなく、次の命として繋がっていく森の姿を見ることが、オーガスタスの心も徐々に生きかえっていった。

こんなこと、知らないんだろうな、とフィーの顔を見てオーガスタスは思った。

そして、それでいいんだな、と思った。
いいんだと。

「ん……」

彫り物の仕上がりに入るところで、フィーがもぞもぞと動きだした。

そっくりだな。

オーガスタスは手の中にあるものと、フィーとを見比べて笑った。

「——あつ、ガス殿！」

フィーは飛び起きると、今度は状況がつかめないようで、あたりをきよるきよるとし始めた。

「あの、わたつ……ぼく、は、いたい」

右手で頭を押さえると、オーガスタスに訊いてきた。

「いやあ、山ネズミ。おまえさん、酔うとすつごいんだなあ」

間延びした声でオーガスタスが言うと、フィーは目を白黒とさせた。

「ぼ、ぼく、酔ったんですか？」

「ああ、おまえさんが薪割りしたあとに飲んだもんがあつたろ」

フィーは、思い出するように、ああ、はい、と答えた。

「それ、酒だったわけ。で、酔って、ふらふらになったおまえさんは」

「はい」

「服を脱ぎだしてなあ」

「——え」

「服をさあ、もう、ばんばんと脱ぎだしてさあ、俺が止めるのも聞かすに、すつぱ……。え、なに、おまえ、顔が真っ白だけど」

オーガスタスが驚いたことに、フィーは蒼白といった言葉がぴつたりの顔つきになっていた。

「……全部、でしょうか」

「はあ？」

「つまり、全て脱衣したと」

思いつめたような顔でフィーが言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4128p/>

とりかえ物語～王女か王子か

2011年9月18日03時17分発行